

国立歴史民俗博物館蔵五山版目録解題

住吉朋彦

An Annotated Bibliography of Gozan-ban Editions in the Collection of the National Museum of Japanese History (Summary)
SUMIYOSHI Tomohiko

〔目録〕

〔解題〕

〔総説〕

【論文要旨】

国立歴史民俗博物館は、開館当初から日本の印刷文化を重視し、中世以前将来の中国刊本、日本中世の刊本や、朝鮮版など、多くの古版本を蒐集して来た。その中でも、中世の印刷文化を体现する諸版本の収蔵は特に篤く、二十餘種もの五山版を擁することは、新設の機関として極めて異例である。

これらの五山版を通覧すると、禅籍を中心として、一般の仏典、漢籍の外典、国書を数点ずつ収め、五山版全体の構成が再現されているのみでなく、南禅寺、臨川寺、天龍寺といった、当時の主要な禅院の出版書を含む他、臨川寺版『禅林類聚』や叡良甫版『唐柳先生文集』等、禅院の出版事業に関与して南北朝後半の展開を担った、来朝刻工の代表的な版本を収めている。さらに外典では、室町期出版の地方的展開にも及ぶ所である。

こうした収蔵の副産物として、中世の印刷技術を垣間見ることが出来る点も意義深く、伝存の殆どない南北朝の五山版の版本について、一面に二、三張を配し、一版の

両面に四、六張を列した版木の様式が類推される資料を、いくつか含んでいた。特に来朝刻工関与の版本では、六張一版の様式を確認できる場合があった。

これらの五山版が禅院の学問を潤した様子も、その書人や蔵印から明らかな伝本が多い。また地方の禅院や、禅宗以外の寺院への流布を示す等、五山版の流通を基礎とする、中近世の学問の広がりや証言する点は貴重であり、その他、近世、近代の学者、蔵書家に用いられた点も注意される。そして、当時一流の蔵書家の見識により選択された諸伝本には、整った早印の完帙が多く、書物としての五山版の意義をよく発揚している。

本稿は、上記の諸点を書誌学的に整理し、目録解題として記述、当館収蔵の五山版コレクションの特色を示したものである。

【キーワード】五山版、来朝刻工、版木、禅籍、漢籍

〔目錄〕

〔內典〕

金剛般若波羅蜜經註解 般若波羅蜜心經註解

唐釋玄奘奉詔譯 明釋〔季潭〕宗湧等注

應永二十七年刊〔南禪〔寺〕雲臥〔菴〕〕 建仁寺兩足院舊藏

大 一冊 H 六四二

首楞嚴義疏注經十卷^{（題分二）}

唐釋般刺密帝譯 宋釋子睿注

〔室町〕刊〔修〕 覆曆應二年刊本

大 十冊 H 七一一

大佛頂如來密因脩證了義諸菩薩萬行首楞嚴經〔會解〕十卷 附經解音釋

唐釋般刺密帝譯 元釋天如惟則注

康應二年刊〔臨川寺三會院留板〕 覆元至正十二年平江師子林刊本 長門

大 五冊 H 七〇九

洞春寺 周防龍豐寺舊藏 拙庵東養手澤 大島雅太郎舊藏

翻譯名義集七卷 附蘇州景德寺普潤大師行業記一卷

宋釋法雲撰^{（附）}元釋普洽撰

〔南北朝〕刊 覆宋紹興二十七年序刊本 尾張萬德寺舊藏 永正十二年賴

譽傳授 延寶九年蓮意裝潢 堯譽加證識語

大 七冊 H 六九〇

〔禪籍〕

鎮州臨濟慧照禪師語錄

唐釋臨濟義玄撰 釋慧然編

大 一冊 H 一三二

延德三年刊〔美〕濃正法〔寺〕栖雲院 萬里〔集九〕加點識語 石井積翠軒
舊藏

佛果圓悟禪師碧巖錄十卷

宋釋圓悟〔克勤〕頌古 釋雪竇〔重〕顯評唱

〔室町〕刊〔濃州瑞龍寺〕 曼殊院舊藏

大 五冊 H 五四九

同

卷九至十配同版本

〔室町〕刊〔京妙心寺正眼菴〕 鹿王院舊藏

大 五冊 H 二二八

祖庭事苑八卷

宋釋陸庵善卿編并注

〔南北朝〕刊 元祿八年光岷施入識語 東福寺法幢院小津桂窗舊藏

大 四冊 H 六四一

五燈會元二十卷

宋釋大川〔普濟〕編

〔南北朝〕刊 覆貞治七年刊本 越後至德寺舊藏 應永十九年久庵僧可施入

大 二十冊 H 二三九

大正四年伊佐早謙感得識語

松源和尚語錄二卷 附塔銘一卷

宋釋松源崇岳撰 釋〔掩室〕善開等編^{（銘）}宋陸游撰

至德四年刊 覆〔鎌倉末〕刊本

半 二冊 H 二三一

佛鑑禪師語錄二卷 附徑山無準和尚入內引對陞座語錄 徑山無準禪師行狀
各一卷

宋釋無準師範撰 釋宗會等編^{（入）}釋了南等編^{（行）}釋無文〔道〕璨撰

應安三年刊〔京〕天龍〔寺〕金剛禪院〔春屋〕妙葩 覆〔鎌倉末〕刊本 永正

八年彭叔〔守〕仙朱句移錄補注書入本 東福寺芬陀利華院 同不二庵 石井

積翠軒舊藏

禪林類聚二十卷

元釋道泰等編

大 二十冊 H 六三九

貞治六年刊〔京臨川寺〔東園〕希杲〕〔覆〕元大德十一年序刊本 東福寺即宗院小津桂窗舊藏

月和尚語録二卷

元釋月江〔正印〕撰 釋居簡等編

大 二冊 H 二二九

〔應安三年〕刊 慈濟院舊藏

圓通大應國師語録 附塔銘

日本釋南浦紹明撰 釋祖照等編

大 一冊 H 六四〇

〔銘〕釋明釋〔懶庵〕廷俊撰 應安五年刊〔西京龍翔禪寺〔滅宗〕宗興〕小津桂窗舊藏

天龍開山夢窓正覺心宗普濟國師年譜 附塔銘

日本釋〔春屋〕妙葩撰〔銘〕釋〔東陵〕永興撰

半 一冊 H 一五〇

〔南北朝〕刊 中島仁之助舊藏

【外典】

論語〔集解〕十卷

魏何晏撰

大 二冊 H 一七〇

〔室町〕刊 無跋 覆正平十九年刊本 明和元年平敬道識語 磯淳 三井高

堅舊藏

韻鏡〔題序〕一卷 首一卷

闕名撰〔首〕宋張麟之撰

大 一冊 H 一八一

〔室町〕刊 フランク・ホーレー舊藏

新刊五百家註音辯唐柳先生文集四十五卷 首目各一卷 特大四十七冊 H 一八〇

唐柳宗元撰〔宋魏仲舉〕編

〔嘉慶元年〕〔丁卯〕刊〔兪良甫〕〔覆〕〔宋〕刊本〔室町〕訓點校補注書入 長祿四 寛正四至文正文 明應九年〔天隱龍澤〕假名抄書入 識語 松方正義舊藏

精選唐宋千家聯珠詩格二十卷 卷十三至二十配同版本 半 五冊 H 七〇八

元于濟編 蔡正孫〔增〕編〔並批注〕

〔南北朝〕刊〔室町末近世初〕訓點補注書入 山本北山松崎慊堂舊藏

【国書】

御成敗式目

〔齋藤長定〕〔淨圓〕等撰 清家點

大 一冊 H 二四九

享祿二年跋刊 大島雅太郎舊藏

聚分韻略〔題目〕三卷〔首題〕〔至五〕

釋虎關師鍊撰

枅形小 一冊 H 一五二

天文八年跋刊 三重韻本〔室町末〕音訓仮名書入 明治三十年黒川真道識語 黒川家舊藏

以 上

【解題】

【内典】

金剛般若波羅蜜經註解 般若波羅蜜心經註解 大 一册

姚秦釋鳩摩羅什奉詔譯 明釋(季潭)宗泐等注

應永二十七年(一四二〇)刊(南禪(寺)雲臥(菴))

後補淡茶色表紙(二四・七×一九・〇糎)左肩打付に「金剛註解(全)」と書す。改糸。一部裏打或いは虫損修補。下小口に旧安田文庫整理票を貼附し「(書機)古板24」と記す。前副二葉。

卷首題「金剛般若波羅蜜經註解」(以下低一格)／(以下低一格)姚秦三藏法師鳩摩羅

什奉 詔譯「先ず經文を標し声句圈を附す。次で改行、格を低し附注、句点を附す。

左右双辺(一九・七×一四・五糎)有界、每半張十一行、行二十一字、趙松雪体。版心、小黒口、三線黒魚尾(下二尾)、上尾下題「金」、下二尾間張数(第二十四至二十七張陰刻)。尾題同首。

次で「御製心經序」、また張を改めず「般若波羅蜜多心經註解」と題し本文、体式同前。

次で低二格、諱字擡頭にて「洪武十年十一月廿有二日」(以下低一格)皇帝有詔令天下僧徒習通心經金剛楞伽三經畫則／講說夜則禪定復(以下低一格)詔取諸郡禪教僧會于天界善世禪寺授讐三經古／註一定其說頒行天下以廣傳(中略)於是(臣)僧(宗泐)等才雖愚鈍／敢竭丹衷述平昔所聞輒為註釋註成以十一年／正月廿有八日詣(以下低一格)闕進呈(以下低一格)上御華蓋殿覽畢乃可其說／(以下低一格)勅刊板行世(中略)(臣)僧(宗泐)謹識(以下低一格)洪武十一年正月 日／(以下低一格)天界善世禪寺住持(臣)僧(宗泐) 註」の跋あり、以下列銜(十六

名)。その末尾、隔二行、低一格にて「應永廿七季庚子十二月日重刊南禪雲臥」記あり。

前副第一葉後半左下方に単辺方形陽刻不明墨印記を存し、第二葉前半に〔室町〕期朱墨にて開題を書す。首に扁額様辺欄中方形陰刻朱印記を擦消し、単辺円形陽刻不明朱印記を重鈴す。前者は建仁寺両足院所用「兩足院」印記と推定される(図1)。

原跋に拠ると本版は、明洪武帝が、その治世の第十年(一三七七)、僧徒に『般若心経』『金剛経』『楞伽経』の習得を命じた政策に伴い、金陵(南京)の天界善世禪寺で三經の校訂と注釈の整理を行った上、同寺の季潭宗泐等が新たに撰進刊行した注釈書の、重刻本に当たる。天界善世禪寺は、元時代に臨済宗大慧派の笑隱大訢を開山として建立された大龍翔集慶寺を改称した官刹で、季潭も笑隱の直弟である。同寺は当初から仏教統制の肯綮とされたが、明朝に変わっても、後に僧録司が置かれるなど、その役割を引き継いだ。⁽¹⁾

大龍翔集慶寺は、元末の五山制度の中で五山之上に格付けられたが、日本では、相国寺を五山に列するため、義堂周信の発案で南禪寺を五山之上とした際に、先例とされた寺院であり、季潭の注書を南禪寺で重刻したのも、当寺の事業を参考としたためであろう。本版を刊行した南禪寺雲臥菴は、義堂に法を嗣いだ大椿周亨を開山とするが、『看聞日記』に拠ると、大椿は応永三十年(一四二三)五月、貞成親王に『金剛経』を講じており、本版を用い注説を成したと見られる。なお該本の前副葉開題の第二条には「一雪嶺和尚授此秘本於九禾曰桂林和尚語云」とあり、本経に関する桂林徳昌の秘説が、雪嶺永瑾から九禾へと伝授されたことを伝え、室町期学僧の間に本書講説の醸成されたことも知られる。

首楞嚴義疏注經十卷(題分)

唐釋般刺密帝譯 宋釋子睿注

大 十册

〔室町〕刊 〔修〕 覆暦応二年（一三三九）刊本

後補黄檗染雲母刷表紙（二九・二〇・三）左肩打付に「楞嚴（幾）」と書す。天地截断、裏打修補。前副葉新補。首に「首楞嚴經疏序／（以下格）（中散大夫守御史中丞充理檢使權判吏部流内銓上護軍瑯琊郡開國侯）／（食邑一千九百戶實食封二伯戸賜紫金魚袋王 隨 撰）／（中略）／（以下格）大宋天聖八年青龍庚午孟冬／二十一日辛丑道齋東軒叙」〔譯經三藏朝散大夫試鴻臚卿光梵大師賜紫惟淨謹上書王〕／中丞（閣下）近蒙以／新製首楞嚴經疏序（中略）（惟淨）頓首」あり。

首題「首楞嚴義疏注經卷第一（之）／一／（以下格）長水沙門 〔子璿〕 集／（中略）／大唐神龍元年（中略）中天竺沙門般刺密帝於廣州制止／道場譯」句下夾注（以下格）。

天地单边（二三・五×全張三二・三）無界、每半張六行、行十五字。二張掛け。版心、中段に「幾上（下） 幾」と巻数、張数のみ標す。尾題同首。巻一の一第四十九至五十一張、巻二の一第三十七（尾）張、巻四の一第一張、巻四之二第二十七至二十八張、巻五の一第五至八張、巻五之二第二十二至二十四張、巻六の一第七至八、十八至二十、二十二張、巻六之二第一至十二、十五至三十張、巻七の一第一至十張以下、辺欄なく字様も異なる補刻の箇所が多い。

大尾題後、後半張の首より「大佛頂首楞嚴義疏注經後跋 楞嚴義疏注經板／開歲久湮沒者四十有九旁搜注本命工刊湊復成／部帙用廣其傳惟願教海恢張法門瑩徹者時淳祐／己酉上元日清湖沈元晟謹識（中略） 録梓流傳歲久散失每爲賢首學／者之恨居士沈君見而憫之旁搜善本續成全書遂／使摩尼寶珠碎而復圓可謂知所施矣（中略） 淳祐己酉中和節瑞巖住山比丘德雲跋」を存す。

間々（室町）朱豎傍句点、以下首のみ、同標鈎合点、〔室町〕墨返点、連合符、音訓送仮名、欄上補注書入、別朱曲截、句点書入あり。首冊前副葉前半に後筆にて「大内板楞嚴義疏壹部十卷／（以下格）晦巖受用」と書す。

毎冊首に方形陰刻「天／室」朱印記、单边方形陽刻「晦／巖」朱印記を存す。

本書は、具名を「大仏頂如来密因脩證了義諸菩薩萬行首楞嚴經」と言い、唐神龍元年（七〇五）に訳經僧の般刺密帝が広州で訳出した、禪宗所依の經典『首楞嚴經』の注解である。宋代には様々の末疏が行われ、解釈を争った。本注の撰者子璿は、華嚴宗第三祖の賢首和尚法藏に学び、臨濟宗黄龍下の慧覺にも師事、河南長水に居住し、本經を始め諸經の注疏を作った。宋宝元元年（一〇三八）に歿するも、その作は「長水疏」として重んぜられた。本版の淵源は、宋淳祐九年（一二四九）己酉に信士沈元晟の刊行した版本にあるが、福建崇安瑞巖院の德雲禪師の跋を附しているのは、その徳憑に依るためで、禪林の版刻であろう。

わが国における本書の版本は、早く鎌倉期に宋版の覆刻が認められる他、南北朝期には「師直版」として著名な暦応二年（一三三九）刊本がある。当該の版本は、師直版に嗣ぐ無刊記の第三版で、やや粗雑な覆刻本である。従来、補刻等の詳しい著録はないが、当館蔵本を見る限り、数多く印刷され、後修が進んでいる。伝承者の晦巖の伝を詳かにしないが、本版が「大内板」と称された事実を伝えている。川瀬一馬氏『五山版の研究』（一九七〇、日本古書籍商協会、以下「研究」と略称）未録。

大佛頂如来密因脩證了義諸菩薩萬行首楞嚴經〔會解〕十卷 附經解音釋
大 五冊

唐釋般刺密帝譯 元釋天如惟則注

康應二年（一三九〇）刊（臨川寺）三會院留板

覆元至正十二年（一三五二）刊本

後補古渋引表紙（二四・二×一七・三）左肩打付に「首楞嚴（幾幾）」と、右下方綫外に「共五」と書す。改糸、虫損修補。首冊前見返し旧紙。首に「大佛頂首楞嚴經會解叙／（以下格）師子林沙門 惟則／（中略）時至正

二年壬午佛成道日。／廬陵沙門惟則述于姑蘇城中之師子林、行を接し二格を低して「(上略)今師子林天如禪師會解一出。／則不待徧探而衆美具在。(中略)茲因募衆、梓以／流通。乃復記經來之歲月云。臨川沙門克立題(読点は字間中央の小圈)」、一行を隔し所引姓氏を列す。末行下に「(板畱平江在城師子林)」記あり。

卷首題「大佛頂如來密因脩證了義諸菩薩萬行首楞嚴經卷第一／(以下低三格)」天竺沙門般刺密帝譯 烏菟國沙門弥伽釋迦譯語／菩薩戒弟子前正議大夫同中書門下平章事房融華受／(格低六)師子林沙門 惟則 會解、句読を附し、每章改行、低一格附注「補註曰(惟則說)」等。

左右双辺(一九・〇×一二・三糎)有界、每半張十一行、行二十一字、趙松雪体、半写刻。版心、細黒口、單線黒魚尾圈發下に「會解卷幾」と題し、張數。卷七首右辺外下方に工名「定久」あり。尾題同首、一行を隔して「經解音釋」と題し、次行以下に低格して音義(注小字)。

卷三尾「常熟州承化里何舍土地渡江／大王界居弟子殷憲同室張氏／妙真施財刊第三卷。近徵景福。遠植勝因。歸命捻持不動尊、隨／衆生心而周徧法界。令我早登／無上覺、度恒沙衆而名報佛恩」、卷四尾「長州縣石碑巷居弟子隋文英／發心施財刊第四卷專用薦導／先父正心居士義甫隋公。長揖／娑婆、往歸安養。如天王賜與華／屋、一門深入無不包容。遇智者／指示神珠。願從心致大饒當」、卷五尾「泉州在城菩薩 戒弟子蔡普明」、卷六尾「平江在城孔聖坊居信士沈右」、卷七尾「平江在城女弟子孫氏妙清行年九十一歲」、卷八尾「泉州在城信士張舜舉同室林／氏妙慧」、卷九尾「泉州弟子李從道并西域沙門／阿咄刺 阿倫 速咄納釋理／菩薩奴 速葛實理 各抽衣／贊同刊此第九及第十卷。所冀／掃絕魔宗。流通聖教。親歷禪那／現境、成無上道圓滿菩提。不遭／邪慮枝岐。作大覺王清淨標指」原施財刊記あり。大尾に單辺有界「嘉慶三年戊辰九月起手入彫至于康應／庚午二月中旬而畢工乃板畱三會院內」牌記を存す。

首冊前見返しに「(室町)期墨筆にて略開題を書す。卷中(江戸前期)墨筆

にて訓点、朱筆にて豎傍点書入。また每冊首欄上に別筆にて「(每半張)長州萩府正宗山洞春禪寺」識語、又別筆にて「(每張前)万年山龍豊 寺丈室(在之)」識語あり。每冊首に單辺方形陽刻「東／養」朱印記(拙庵東養所用)、同「青谿／書屋」(大島雅太郎所用)朱印記、同「小汀氏藏書(書體)」朱印記(小汀利得所用)を存す(図2)。

本書は前述の『首楞嚴經』につき、平江(蘇州)師子林寺の天如惟則が注解を附したもの。天如は臨済宗楊岐派の人で、一世を風靡した天目山の中峰明本に法を嗣ぎ、元末に名望が高かった。元至正二年(三四二)の天如自序に「余會諸家要解、以通大途。異不公平衆者、節之。異而互通者、互存之。互爲激揚者、審其的據而取之。間有隱畧乖隔處、則又附己意、目爲補註。若合殊流同歸于海、故謂之會解」と述べる所からも、諸注の総合を目指した本書の編集方針は明らかである。本版の底本である元至正十二年刊本の開版については、天如勸持叙に附して述べられた克立の刊語に「會解并前後叙引、隨本經通爲十卷。昨於甲申歲間、嘗刊爲梵夾廣行矣。或謂梵夾固佳、惟四方禪講遊學之士、尚恨包笈中將帶未便。於是吳郡張子明倡率同志復刊爲方冊。蓋各從其便耳。書之者同郡羅元也。施梨板者王文勇也。其點校參詳、勸募營辦者、宜春嗣諷華亭師訓善遇高昌正因也。刊始於至正壬辰之暮春、至十有一月而工畢」とあり、本書は早く至正三年甲申以前に折り帖で発刊されたが、遊行に不便であると、張子明等により冊子での再刊が計画され、至正十二年の三月から十一月に掛け、分担開刻されたものである。刊出された版本は師子林寺に置かれた。この版本は長く存続し、少なくとも嘉靖六年(一五二七)印本、万曆三十年(一六〇二)印本の兩種が知られ、この間には修刻も加わっている。その早印本は、日本の神宮文庫に卷九至十のみの残欠本を存するものの、比較的稀であり、該版を覆刻した本版の参考価値も高い。この元至正十二年刊本は、卷三至十の八卷分につき、施財者の名が附記されており、当時の天如教団の支持層の一端が知られる。その所住地

は、巻四、六至七は地元平江城周辺、巻三は近傍の常熟の善男善女が施財し、巻五、八至十は泉州（福建）城周辺の信者が出資、その教線が南方にも及んだことを教える。そして、末尾の巻九至十の泉州の出資者には西方出身の僧が含まれ、元時代の泉州の国際的性格を示している。

本書の五山版を開刻した臨川寺は、開山夢窓疎石の弟子が修禪する専用の道場、三合院はその開山塔を護る塔頭で、刊版を同所に置くことは、当山の公用を意味し、天如の注書が、南北朝に五山派を主導した夢窓派の教学中で、非常に重視されたことを示す。その開版は嘉慶三年（一三八九）九月に始まり、半年を経て、翌康熙二年二月に完工した。

同版の印本には別に大東急記念文庫蔵本、東洋文庫蔵本等があるが、当該の一本は地方禅院に伝播し、長門洞春寺から周防龍豊寺へと伝来した。洞春寺は元亀四年（一五七三）に、嘯岳鼎虎を開山として毛利輝元が創始した毛利家菩提寺で、始めは安芸吉田、広島に在ったが、毛利家と共に転出し、慶長十一年（一六〇六）から長門萩、文久三年（一八六三）からは周防山口に移された。該本は後に周防徳山の万年山龍豊寺の什物となり、近代蔵書家の手を経て今日に伝わった。該本にはまた、洞春寺に止住した拙庵東養の鈴記がある。拙庵は萩の人、延宝三年（一六七五）に生まれ、洞春寺の天桂碩祐に嗣法、元禄七年（一六九四）に上洛し、建仁寺両足院の住持となり、元文元年（一七三六）に歿した。⁽³⁾ 該本はその萩時代の手沢と目されるが、両足院には同じく拙庵手沢の〔江戸中期〕刊本『師子林天如和尚語録』を存し、天如の著作に親炙したことが知られる。

翻譯名義集七卷 附蘇州景德寺普潤大師行業記一卷 大 七冊
宋釋法雲撰（附）元釋普洽撰

〔南北朝〕刊 覆宋紹興二十七年（一一五七）序刊本

後補洪引表紙（二五・五×一五・〇糎）左肩題簽を貼布し「翻譯名義集

〔四〕」等と書す。虫損修補。首に「蘇州景德寺普潤大師行業記（中略）大徳五年歳在辛／丑九月九日嗣祖住持永定教寺吉祥雄辯／大師普治記、行を接し低二格にて「此記安於翻譯名義之前庶／觀覽者知夫能述人之勝也」記、次で「翻譯名義序／^{（低五）}唯心居士荆谿周 敦義述／（中略）紹興丁／丑重午日序」、低一格「（上略）／^{（四格）}無機子 〈法雲〉奉勉」あり。

巻首題「〔翻譯名義集一／^{（格三）}姑蘇景德寺普潤大師^{（隔四）}《法雲》編〕」、次行より序、次半行より低一、十一格にて小目、次行「〔十種通號第二〕」と標し、次半行より本文。梵語下夾注（小字双行、更に夾注〔細字双行〕、每編改行。

左右双辺（一九・二×一一・五糎）或いは四周双辺、有界、每半張五行、毎行大十字格、小二十字、欧陽詢体。闕筆、玄弘敬境竟殷樹、但し闕かざる者多し。版心、白口、单黒魚尾下題「梵語第幾」、張数。稀に下辺工名あり。工名、孟榮、才、良甫、ム。尾題「／翻譯名義集第一」等。首のみ墨合返点、連合符、送仮名、稀に欄上標注書入。大尾後見返しに「此本者雖為妙音院經藏本／空深房（仁）處分与者也／ 永正十二年（乙亥）五月廿八日權上僧都法印頼譽」識語、右肩に〔堯譽〕筆にて「頼與御自筆」と、第二冊後見返しに「此羽訳名義集七軸ハ根嶺字頭妙音院開祖／頼譽和尚ノ御所持ナリ然シテ弟子玄性和尚ヘ付属ノ玄性和尚又当寺性瑜和尚ユ付属之宝典ナリ／ 尾州万徳寺常住物也 四十四世堯譽識」〔第三冊前見返しにもほぼ同文〕と、大尾に「○頼譽和尚ハ根嶺能化学頭職（也）妙音院開山ナリ院ノ前二ノ小池アリ大衆尊崇シテ小池ノ法印ト称ス（云云）生国尾州／○妙音院玄唯和上（空深房）學頭能化職（也）濃州人也／頼譽ノ御弟子也^{（隔四）}万徳寺四十四世／^{（五格）}堯譽識」と書す。首冊尾に別筆にて「〔結綱集頼譽傳云和尚名頼譽字ハ定嚴ト云云恐ハ空ノ字予移住當寺披覽此書（書誤歟）小池坊頼譽法印ノ附與（空深房）玄性法印又玄性法印属託（雷延房）（又頼延ト書）性瑜法印ノ感累世高僧所持本而

裁紙端係表帛／以寶之耳延寶九（辛酉）稔初冬穀旦／（格四）（万徳寺第廿六世 金剛子蓮意）識語（傍記は後筆）。首冊前見返し背面に堯譽筆にて「翻譯名義集」右下方に「萬徳寺（在郷）□物」と書す。毎巻首に方形陰刻「金／山」朱印記、毎冊首に双辺方形陽刻「小汀文庫（書格）」、毎冊尾に単辺同「小汀氏臧書（同）」朱印記（以上二類、小汀利得所用）を存す（図3）。本版の底本は宋紹興二十七年（一一五七）丁丑の周（葵）（敦義）の序を有し、その文は刊刻の意に及ばないが、北京中国国家図書館、台北国家図書館に蔵する宋版本では、闕筆が「洹垣」に至り、紹興年間の版刻と認められる。⁴ 本版はその覆刻であるが、闕筆は必ずしも精密ではなく、元大徳五年（一一三〇）と署する普治の「蘇州景德寺普潤大師行業記」を後に附加している。同記末には無名氏の「此記安於翻譯名義之前。庶觀覽者知夫能述人之勝也」の語を見るのみ、どの時点で増補されたのかは不明であるが、本版の他には見られない。なお、五山版の他の伝本ではこの記を後附する場合がある。

本書は様式の上からも、宋元版を摸した五山版と呼ぶに相応しいが、巻七に來朝刻工とらしい工名のあることから、禪院周辺で刊行されたことが確かめられる。工名のうち二字を遺す「孟榮」は、貞治六年（一二三六）に來朝した刻工集団内の陳孟榮であろう。彼は來日早々、ちようど貞治六年に臨川寺で刊行した『禪林類聚』の目録を補刻した他（後述）、応安四年（一二三二）には自ら主催して『宗鏡録』を刊行している。そうすると、「才」は、陳孟榮と同族らしき陳孟才と思われる。孟才は福州の出身で、応安三年（一二三〇）九月、陳伯寿と共に義堂周信に謁見し、記録に名を止めた。さらに「良甫」は、至徳元年（一二三八）に『伝法正宗記』を、嘉慶元年（一二三八）に『唐柳先生文集』を刊行した（後述）、福建莆田県出身の刻工餘良甫であろう。「ム」は未詳。彼等の記名は巻七の限られた張にしか顕れないため、全体に関与したかどうか不明であるが、いずれにしても本版は、応安から嘉慶の南北朝後期

以前に刊行された版本である。

国立国会図書館蔵本、宮内庁書陵部蔵本等、同版本の伝存は比較的多いが、当該の一本は、歴代の識語に明らかなように、尾張万徳寺の伝来である。長沼山万徳寺は真言宗豊山派の寺院で、現在の稲沢市に在る。建長六年（一二五四）空円が中興してから繁榮し、中世には尾張真言宗の拠点の一であり、現在でも古写本の『覚禪鈔』や高野版等、数多くの聖教を収蔵する。⁵ 伝来の判明するのは室町後期以降の情況で、根来寺学頭坊妙音院開祖の頼譽が、妙音院の什物であった該本を、永正十二年（二五二五）に弟子の玄性に附与して万徳寺の常住となり、同寺の性璩の手を経て伝わった。本書の内容は梵語を解説する辞書であり、梵語の音形を重視する真言宗の学侶に重用されたことは当然であるが、中世後期に五山版が伝播し、根来寺や尾張万徳寺等、真言宗の寺院にも備えられたことは、書物流通と学問の扶植という観点からも重要な事例である。

もう一点、該本は、五山版の版本の様式を知る上で、有用の情報を含んでいる。日本中世の冊子用の版本は、片面に二張、表裏四張の配置を採る長版が多いが、五山版の中には「三張掛け」と呼ばれ、同一版面上に三張の連続する現象が指摘される。該本でも書脳部の墨付きに拠り、例えば巻一の第二至四、五至七張も、それぞれ同一版面上に隣接することが確認できる。そして、これらの張子は一版の表裏に存在し、「六張一版」の版本を成すことが想定されるが、⁶ 該本には、首の「蘇州景德寺普潤大師行業記」、周敦義「翻譯名義序」、法雲自序（以上計五張）と巻首の一張は左右双辺であるのに、巻一第二張以下は四周双辺に変わっていたり、巻七第一至六張に「孟榮」、同第十三至十七（第十八虫損）張に「才」の工名が附されたりする等、版式上、六張一組と見られる現象が指摘され、「六張一版」の説を支証する。なおこれに従えば、首の「行業記」は「此記安於翻譯名義之前」との附言の通り、前附される順序が版刻時に想定された形である。『研究』未録。

〔禪籍〕

鎮州臨濟慧照禪師語錄

大 一冊

唐釋臨濟義玄撰 釋慧然編 釋存獎校

延德三年（一四九二）刊（美）濃正法〔寺〕栖雲院

覆永享九年（一四三七）刊本

後補栗皮表紙（二七・六×一九・八糎）。五針眼、改糸。本文厚手楮紙、

虫損修補。首尾に旧見返しを副う。首に「鎮州臨濟慧照禪師語錄序／

延康殿學士金紫光祿大夫眞定府路安撫使兼／馬歩軍都總管兼知成德軍

府事馬防撰／（中略）宣和庚子中／秋日謹序」を存す。

卷首題「鎮州臨濟慧照禪師語錄／（格低六）住三聖嗣法小師 慧然 集」、

每節改行。第九張鈔補。

左右双辺（二九・八×一四・四糎）有界、每半張十一行、行二十字、歐陽

詢体。尾題「鎮州臨濟慧照禪師語錄終／（以下低二格）住大名府興化嗣法小

師 存獎 校勘／住福州鼓山圓覺菴 宗演 重開」。尾題後一行を

隔し一格を低して「延德三年辛亥八月十五日季恭居士鏤梓捨入／濃之正

法栖雲院」記あり。

〔室町〕朱豎句点、同墨返点、連合符、音訓送仮名書入、〔室町〕別朱墨

欄外行間補注書入、又別墨欄外「安云」等片仮名交り補注書入を存す。

後副旧見返し前半に書入別手にて「（字致不傳）」／臨濟大師之語録因大高城之

主盟花井秀世見竟焼香「」／欽塗胡朱乱墨蓋所聞景川悟溪之二大老也

雖然「」／有外差舊參之杜多質焉則虎嘯巽風增爪牙之／威龍吟需雲振

頭角之勢者非可狐疑也／（格低四）梅花無盡藏漆桶萬里（附訓略）」識語、改

行して別手にて「梅が香や風ふかる、所まで」墨書、同後半に又別手に

て「不動院」等墨書あり。代赭色不審紙。首に単辺方形陽刻「積翠軒文

庫（書楷）」朱印記（石井積翠軒所用）、同「小汀氏藏書（書楷）」朱印記（小汀

利得所用）を存す（図4）。

臨濟宗の祖となった臨濟義玄の言行は、法嗣の編校によって所謂『臨濟録』にまとめられた。現存本は宣和二年（一一二〇）馬防の序を有つ宋本に由来する。本書は日本でも宗門の古典としてよく読まれ、早く鎌倉末期の嘉暦四年（一三二九）の版刻が知られるが、本版は、直接には永享九年（一四三七）法性寺版に依拠した室町期の翻刻で、美濃正法寺で刊行した早期の地方版であり、次掲の瑞龍寺版『碧巖録』の刊行と相呼応している。

岐阜の靈樂山正法寺は、現在はその跡を絶っているが、南北朝に美濃守護土岐頼康の築いた革手城に附随して建立された、土岐氏菩提寺で、開山は臨濟宗法灯派の嫩桂正栄であり、寺格は諸山に列した。室町期には守護代斎藤氏とも密接な関係を持ち、斎藤妙椿の外護もあって、数多の五山僧や、一条兼良を始めとする公家衆が滞在するなど、美濃に於ける京文化受容の中心となった。その栖雲院は、嫩桂から信仲自敬、梅隱祐常と正法寺歴世の系譜を引く実仲和尚の居所で、太初和尚に引継がれたことが、万里集九『梅花無尽蔵』巻六の「樵斎記」に見える。延徳三年、これに施財して本版を刊行した季恭居士は、何人か不明。

該本の旧後見返しには「梅花無盡藏漆桶萬里」即ち万里集九の署名を附した加點識語が移写され、大高城主花井秀世のために、景川宗隆、悟溪宗頼の説に従い朱墨を加えた旨を述べてある。景川、悟溪は共に臨濟宗大応派の僧、妙心寺の歴世に名を連ねる。悟溪は斎藤妙椿の請いに依って美濃瑞龍寺開山となった。万里には悟溪と詩の贈答があり、また斎藤氏の元で同席する等（『梅花無尽蔵』巻四、五）関係を持っているから、彼の講説に接した可能性がある。その開陳を求めた花井秀世は伝未詳、尾張知多郡花井氏の係累であろうか。万里は文明二年（一四七〇）に美濃龍門寺に住し、その後も長く鵜沼に寓居したから、本版刊行の場に近い位置に在った。そこで、該本識語の内容も万里の活動の一端を映したと考えられるが、その筆致は万里の墨蹟と異なり、該本書入を識語の通り

と断言することはできない⁽⁷⁾。他に大東急記念文庫蔵本、お茶の水図書館成實堂文庫蔵本、京都大学附属図書館谷村文庫蔵本等を存する。なお本版には慶安元年(一六四八)刊行と記す附訓の翻刻本がある。

佛果圓悟禪師碧巖錄十卷

大 五册

宋釋圓悟(克勤)頌古 釋雪竇(重)顯評唱

〔室町〕刊(濃州 瑞龍寺)

後補縹色表紙(二六・一×一八・一糎)左肩題簽を貼布し「碧巖集 〔三至四〕」等と、或いは剥落痕打付に「碧巖集(一至二)」と書す。扉、每局双辺二層「^(上)宗門第一書・^(下)圓悟碧巖集」○無邊風月眼中眼○不盡乾坤燈外燈○柳暗花明十萬戸○敲門處處有人磨○一・(右)〔碧巖集。標的宗門眞霧海之南針夜途之ノ北斗也。一炬之後善刻不存。今多方尋訪。ノ得成都大聖慈寺白馬院趙大師房眞本。〕・(左)〔與江浙諸禪刹所蔵本參攷無訛敬繡梓ノ以壽其傳。得於希有發於久秘。圓悟心法ノ了然目前。向上機關頭頭是道具眼幸鑒。〕・(右)〔杭州北橋北街東嶠中張氏書隱印行。〕・(左)〔本朝濃州路瑞龍禪寺新刊〕牌記^(左邊外一行)。首に「(上略)時建炎戊申暮春晦日ノ參學嗣祖比丘(普照)謹序」・「(上略)嶠中張煒明遠燃死ノ灰復板行亦所謂老婆心切者ノ歟大德四年庚子四月初八日ノ癸丑紫陽山方回萬里序^(書行)」・「(上略)嶠中張ノ氏始更刻木來謀於予遂贊而成之且為題其首大德ノ九年歲乙巳三月吉日玉岑休ノ居士聊城周馳書於ノ錢唐觀橋寓舍^(書行)」・「(上略)大德甲辰四月望三教老人書」を附す。三教老人序末行下辺に「古杭朱子成刊」記あり。

卷首題「佛果圓悟禪師碧巖錄卷第一」^(以下低)師住澧州夾山靈泉禪院評唱ノ雪竇顯和尚頌古語要」(第二、三行首のみ)、句点を附す。每章改行、一格を低して頌古を附し、句下に評を差夾む(小字)。

四周双辺(二八・〇×一一・四糎)有界、每半張十一行、行二十一字。版心、小黑口^(接内)、三黑魚尾^(下二尾)、上尾下題「碧巖幾〇」、下二尾間張数。

尾題同首。每卷尾題後下方に双辺「嶠中張氏ノ書隱刻梓^(卷三七、九條)」、卷五尾題後に双辺無界「此集自大慧一炬之後而又重罹兵燹ノ世鮮善刻今得蜀本板正頗完猶恐中ノ間亥豕魯魚不無一二ノ四方具眼高人為 是正之抄錄ノ見教當復改竄俾成全美禪宗幸甚^(格低)」嶠中書隱白、卷六尾題後同「嶠中書隱鼎刊圓悟碧巖錄幸已訖事ノ四方禪友或收得祖庭事苑萬善同歸ノ錄及禪宗文字世罕刊本者幸乞ノ見示當為繡梓以廣禪學此亦ノ方便接引之一端也告母ノ舍玉幸甚 稟白」牌記あり。卷十尾後半張に「後序ノ(中略)ノ宣和乙巳春暮上休召人關友無黨記^(書行)」、尾に「重刊圓悟禪師碧巖集疏」・「(上略)大ノ德壬寅中秋住天童第七世ノ法孫比丘淨日拜手謹書^(書楷)」・「(上略)延祐丁巳迎ノ佛會日徑山住持比丘希陵拜ノ書以為後序^(書行)」・「(上略)是年延祐丁巳中ノ元日海粟老人馮子振題^(書楷)」を附す。〔江戸初〕朱標圈、豎傍句点、墨返点、音訓送仮名、欄上校注(用「福本」)書入。每冊首に方形陰刻不明朱印記、鐘形陽刻「曼殊ノ圖書ノ之印」朱印記を存するも、擦消し(図5)。

この『碧巖錄』も臨済宗の基本図書であり、中世に最も広く行われた禪籍と言える。五山版中でも、辞書の『聚分韻略』に次いで版本が多く、少なくとも十一種に及ぶ。その根本は南北朝に建仁寺の玉峰正琳が、元延祐四年(一三一七)丁巳頃に発行された大徳間(一二九七―一三〇七)校訂の杭州嶠中書隱張煒(明遠)刊本を覆刻したらしい版本で、扉の牌記や序跋を見る限り、杭州張氏刊行の坊刻本であることは確実であろうが、大徳四年(一三〇〇)、同九年校刊の序を備える一方、張氏の校訂を記した延祐四年(一三一七)の跋をも有するから、大徳刊延祐修本であるのか、大徳の刊行が延祐までずれ込んだものか、判別が着かない⁽⁸⁾。玉峰刊本には扉の牌記が確認されていないが、南北朝の同系の別版に既に同様の扉が認められる。

本書の五山版は室町期になると地方に伝播し、各所に翻版を生じており、能登総持寺、越後本源院、日向真幸院等、曾て版刻を聞かない土地

にも出版印刷が扶植された。この美濃瑞龍寺版は、これら地方版の中でも比較的早期の開版で、心宗禪師悟溪宗頓の勸進に依って刊行された。その経緯は『大興心宗禪師行状』に詳しく、斎藤妙椿に招かれ瑞龍寺の開山となった悟溪は、文明二年（一四七〇）に伽藍を完成させ、この頃に『碧巖録』の開版を企てた。彼は妙椿の大力に頼らず、美濃の権門貴戸を尋ねて一字当たり一文銭の出資を求め、大衆の結縁を導きながら開版を達成、高下の崇仰を集めたと言う。本版には扉の左辺外に「本朝濃州路瑞龍禪寺新刊」と記すのみであるが、禪院出版の教導的側面をよく示した事例である。悟溪宗頓は、応永二十三年（一四一六）生、尾張丹羽郡の人。出家して臨済宗大応派の雪江宗深の嗣となり、瑞龍寺開山となった後、大徳寺、妙心寺にも住持し、関山門下の東海派の祖となった。明応九年（一五〇〇）寂、諡号大興心宗禪師。

本版の伝本は比較的多く、岩瀬文庫蔵本、国立公文書館内閣文庫蔵本、国立国会図書館蔵本、宮内庁書陵部蔵本等、枚挙に暇がない。該本が、近世に曼殊院の収蔵であったことは、五山版の流布を考える視点からは重要である。『研究』未録。

同 卷九至十配同版本

大 五冊

〔室町〕刊（京妙心寺正眼菴）

後補標色雷文繫桐花唐草文空押艶出表紙（二七・九×一七・七糎）左肩打付に「碧巖録（幾幾）」と朱書、首冊のみ右肩打付に「盈」と白書す。扉前本に同じ、但し左辺外「山城州西京妙心禪寺内正眼菴新刊」記。首に建炎二年（一一二八）普照、大徳四年（一二〇〇）方回、同九年周馳、同八年三教老人書を存す。三教老人序末行下辺に「（古杭朱子成刊）」記あり。巻首も同前。

四周双辺（二七・八×一一・三糎）有界、每半張十一行、行二十一字。版心、小黑口（（内））、三黒魚尾（（下二尾））、上尾下題「碧巖幾〇」、下二尾間張数。

尾題同首。每巻尾に双辺「嶠中張氏／書隱刻梓」等牌記あり。

首に夾紙、〔江戸初〕朱墨を以て補注書入、卷一至八に〔室町末近世初〕朱墨点、句圈、行間校補注、同朱墨欄外夾紙補注〔用「楞伽抄」〕或抄「不二抄」〕「私云」〕「句會」説書入。第一至二冊首尾に「鹿王院（蔵書）」朱墨識語あり、墨減或いは刪去。毎冊首に方形陰刻有界「隨縁聚散／受用無盡」、単辺方形陽刻「東／湖」朱印記を存す。

（以下配本）天地截断。卷九首匡郭一八・〇×一一・〇糎。尾に宣和七年（一一二五）無黨後序、重刊疏、大徳六年（一二〇二）淨日跋、延祐四年（一二二七）希陵後序、同馮子振跋を存す。稀に〔近世初〕朱墨補注書入。毎巻尾に鼎形陽刻「魏／海」墨印記あり（図6）。

前本と同系統の版本で、妙心寺正眼菴の刊行。菴主の系統や存続の時期等不明。本版は五山版の末流に出て、室町末から近世初の妙心寺派の隆盛と軌を一にして、禪林を中心に広く流布している。同版本には東北大学附属図書館蔵本、大阪府立図書館蔵本、大東急記念文庫蔵本、岩瀬文庫蔵本、お茶の水図書館成實堂文庫蔵本等と、これもその数が多い。妙心寺では江戸初に本版の翻刻附訓本をも刊行した。

該本の判型は大振りで、配本もさらに大きく高さ三十糎に近いが、建仁寺両足院第二十九函蔵本や、南禪寺金地院旧蔵京都大学人文科学研究所松本文庫蔵本等、同版の諸本も同様であり、注説の補記を前提とした造本と見え、現にこの歴史民俗博物館蔵本にも、岐陽方秀の『碧巖録抄』を中心とする増入が周密である。岐陽の注書は「不二抄」とも呼ばれ、来朝僧竺仙梵僊の「楞伽抄」等の室町初以前の注解を集成した上、自説を補ったもので、広く転写された⁹⁾。また別に「句會」の引用も夥しいが、これは元熊忠編集の韻書『古今韻会举要』を参考したもの。同書は中世後期の禪林の漢字読解に基礎を提供した辞書の一で、「不二抄」にも引用はあるが、その頻度から見て、該本の増入者が独自に補ったようである。『研究』未録。

祖庭事苑八卷

大 四冊

宋釋陸庵善卿編并注

〔南北朝〕刊

後補淡茶色表紙(二四・八×一七・三糎)左肩打付に「祖庭事苑(幾之幾)」と、第四冊のみ題簽を貼布し別筆にて「祖庭事苑(七八終)」と、每冊左下方打付に又別筆にて「永安」と書す。右肩隅切りの方簽に「月百十六(全四)」と墨書、双辺方形陽刻「西莊文庫」(書横)印記朱鈐藏書票(小津桂窓所用)を貼附す。下小口に安田文庫「(書横)古板28」整理票を附す。天地截断。首に「祖庭事苑序」(中略)四明苾芻法英書、「祖庭事苑目錄」を存す。

卷首題「祖庭事苑卷第一」(格低)陸庵 〔善卿〕編正／雲門録上、標語下夾注(小字)〔双行〕、每編改行。

左右双辺(二七・二×一一・二糎)有界、每半張八行、行小二十八字、歐陽詢体。版心、白口、單黒魚尾下題「祖幾」、張数。三張掛け。尾題「祖庭事苑卷二」等。尾に「(上略)大觀二／年八月二十七日建武軍節度使／同知大宗「(單辺方形陽刻「建武軍節／度使之印」印記摸刻)」子學事上／柱國(格隔)〔仲爰〕(同)謹題(刻陰)」、「(上略)紹興甲戌中秋盡庵／比丘〔師鑒〕跋「(眉山王似刻)」、「後序／陸庵道人集祖庭事苑刊行於世于茲／有年(中略)住靈泉之七年燕坐／無事義然出施繒鏤板再廣其傳(中略)紹興甲戌夏六月玉津比丘(紫雲)序」を存す。中間、仲爰題辭末行より隔一行、低一格にて「紹興甲戌季夏重別刊行(刻陰)」記あり。

大尾左辺外に「元祿八年乙亥六月 日／(格低)〔光岷寄附〕と書す。每冊首尾に單辺方形陽刻「(改行)東福法幢院(書横)」墨印記、大尾に双辺楕円形陽刻「桂窓」朱印記を存す(図7)。

祖師語録の要語に附注し、広く禪籍の解説に応用された『祖庭事苑』は、大觀二年(一一〇八)以前に成って北宋末に行れたが、南遷の後、紹興二十四年(一一五四)に再刊されて、江湖に通行した。今、その宋本を

閲し得ないが、日本には早くから齎され、さらに二種の翻版が行われている。その一は紹興の紫雲序末に單辺陰刻「此板見在南禪／寺皈雲庵印行」の牌記を有する南禪寺歸雲庵刊本であるが、この本は伝存に乏しく稀覯である。もう一種が掲出の〔南北朝〕刊本であるが、両者は極めて相似の版本であって、いずれかがいずれかの底本となっているのか、或いは両者とも直接宋本に拠っているのか、対査の便宜を得ない現在の所、その関係は不明である。⁽¹⁾

他に大東急記念文庫藏本、国立国会図書館藏本、建仁寺兩足院藏二本、前田育徳会尊經閣文庫藏本等がある。該本を伝えた東福寺法幢院は、宝幢院とも称し、南北朝時代に無德至孝が開創した塔頭、無德は円爾の直弟無為昭元に嗣法し、京安国寺の中興開山となった師家である。元祿八年(一六九五)に該本を寄附した光岷は、その伝を見ないが、恐らくは同院の関係者であろうか。ただその塔院も現在に伝わらず、該本は小津桂窓の手を経て、近代藏書家の有に帰した。

五燈會元二十卷

大 二十冊

宋釋大川〔普濟〕編

〔南北朝〕刊 覆貞治七年(一三六八)刊本

新補淡代赭色漉目表紙(二七・七×二一・〇糎)左肩に題簽を貼布し「(貞治／板) 五燈會元」「幾」と、首冊のみ中央に紙箋を貼布し「伊佐早謙」筆にて「(建長寺)佛印大光禪師手澤(師上杉武庫憲將公長子也)」と書す。次で後補茶色古表紙、左肩題簽を貼布し「五燈會元(幾)」と書す。左下方打付に冊数を書す。首に「捐財鳩工鉸梓於靈隱山實 大川老／盧都寺贊成之帙成保庵携一部來再／三懇予為序(中略) 峇／寶祐改元清明日通庵王(補)謹序(書横)」を附す。

卷首題「五燈會元卷第一」(目小)／七佛、語下夾注(小字)〔双行〕、每章改行。左右双辺(二一・五×一四・八糎)有界、每半張十三行、行二十四字、欧

陽詢体。闕筆、玄弘敬鏡貞幀樹。版心、上細黒口、下白口、単黒魚尾下題「五灯幾 小題」、張数。卷一第四十四張版心下辺に原工名、錢良。尾題同首。卷一尾未刻部に陽刻「太宗皇」文。尾に「(上略)謹就/景德靈隱禪寺命諸禪人集成一書/名曰五燈會元以便觀覽爰竭己資/及募同志選工刻梓用廣流通(中略)寶祐元年正月旦日沈(淨明)謹題(書楷)」、「偈勸 正仲貞首座募緣刊五燈/會元版(格四)妙喜庵主圓月/(中略)湖州武康沈淨明刻梓置之靈鷲山年/遠乃版雖壞損願力堅固不可窮本朝見/有夭長者號曰雪江功德主命僧正仲重/刊行正仲奉命自謂曰如此功德莫獨專/當以普及一切人同結般若大勝緣以此/勝緣功德力世世生生作善種同發無上/菩提芽 貞治馬兒年正月望書/(以下格)此錄禪徒至寶也禪行/我朝莫盛如今未刊行/焉誠為缺典廣化衆緣/終成美事戊申重陽日/泉南小比丘彦貞謹識/(以下格)版留建仁靈洞/法印宗應刊行(書楷)を存す。朱標圈、句点書入、欄上稀に別手墨筆にて音義、本文校改書入あり。標色不審紙。第二以下每冊首に方形陰刻「實際(書楷)」墨印記と、每冊尾に「應永壬辰八月 日 僧可置之」識語、王序末並に第二以下每冊首、每冊尾に「至德寺公用」識語を存す。卷十五第四十一張右辺外より後筆にて「至德寺開山大永寺中興開山延命寺長慶寺寶積寺聚福寺相抱七箇寺之住持也」識語。また每冊首に「龍門寺公用」と識すも、第五冊の他は墨減。第一冊尾に「能山藝衲六十余齡之春夏秋之間/若衿階屋於錫第三透閣畢」、第三冊後見返しに「廿卷名目大旨算数一千九/百五十六則閣畢字々不/審之處韵府玉篇以撰調□也/(以下格)能山藝衲(押花)」識語。第四冊旧表紙中「獨向破窓看此錄老懷/明々老眼的々古聖先/賢對面不遠言談問/答末代之如見懷之/存之于朝對衆閑語/暮又向昂唱佛理佛/道祖法依師之邪正/為佛骨祖髓邪師/之說邪法聖人之說悉/是佛口祖舌也」墨書、第六冊前見返しに「盲者點眼之法炬病目/發轉之仙藥者號這箇/之禪錄者歟」、同尾に「道號者 從大中寺圭庵大和尚給茲 表號者 同/從龍洲大和尚被下」墨書。卷七第四至五張間辺外に「無念也於北国没事

哉」「七十九歳之冬書之/(以下格)佛智大通大禪師前永平月松宗鶴表號不忽判/(以下格)形見」識語。卷十一第五張前半に不明朱印記、第十四冊尾に双辺円形陽刻不明朱印記を存す。首に紙葉を補い「貞治板五燈會元二十卷建長/寺佛印大光禪師以應永十九/壬辰年八月所置于越後国府/至惠寺也今則只存一寒村而已/米澤鳳臺寺則其轉移改號者/云禪師名僧可號久庵上杉兵庫/頭憲將長子也以遺命留学/于明國殆十年学之德可知/也師以同二十四年正月廿六/日示寂吁嗟此書埋没埃塵/鼠矢之中幸免乎兵燹而歸乎/我物之頭晦果有数也/大正乙卯五月補綴并識/(以下格)樞軒老生謙」墨識、首に不明押印、尾に方形陰刻「兼/印」、単辺方形陽刻「樞軒」、每冊首に同「伊佐早兼/圖書之寶」朱印記、双辺同「小汀文庫(書楷)」朱印記(小汀利得所用)あり(図8)。

本書は、世代ごとに祖師の言行を集録した『景德伝灯録』以下の法灯録を選集再編した書で、杭州景德靈隱寺の大川普済が編し、施財を得て宝祐元年(一二五三)前後に刊行した経緯は、王序、沈跋に見える通りであって、現にその原本と目される版本を日本の宮内庁書陵部に蔵する(四〇四・七七)。またこれに基づいて行われた本朝重刻の五山版は、掲出本末尾、中巖円月の七言の勸進偈によつて知られる通り、長者雪江氏の施財と、臨済宗法灯派の僧正仲彦貞の勸進に依り、貞治五年(一二三六)丙午に事業を始め、建仁寺靈洞院で宋版を覆刻し、同七年戊申に成った。しかし当館蔵本は貞治七年版そのものではなく、これをさらに覆刻した別版に当たる。大正四年(一九一五)の伊佐早氏の識語にも混同されているが、貞治七年は二月に応安に改まるから、精確には本版を貞治板と見ることはできない。一方、該本には応永十九年(一一四二)の識語があり、室町初に流通していたことがわかるため、開版の時期は応安以降、概そ南北朝末と見ることが出来る。同版本には大東急記念文庫蔵二本、国立国会図書館蔵本、前田育徳会尊経閣文庫蔵本、東洋文庫蔵二本がある。

該本の伝来は複雑で、まず応永十九年に僧可が至徳寺に置いた由が見える。これは米沢の郷土史家伊佐早氏識語に説く通りで、久庵僧可は、関東管領にして上野越後守護職を兼ねた上杉憲顕の孫、貞治五年に逝去した憲將の子で、応安二年（一三六九）に示寂した円覚寺の無礙妙謙の嗣。入明帰国して、円覚寺、建長寺の住持に歴任した後、越後府中（直江津）に移つて實際庵を構え、至徳年間（一三八四—七）頃、至徳寺を建立し、応永二十四年に示寂した。諡号仏印大通禪師。至徳寺は慶長三年（一五九八）上杉景勝の移封に伴い、米沢に移転して鳳臺寺と改称、曹洞宗に改めた。該本には能山総持寺僧の識語がある等、曹洞宗に關連し、無極慧徹、月江正文下に当たる下野大中寺の圭庵伊白、龍洲文海や、永平寺に出世したとされる月松宗鶴の名が見える。しかし至徳寺は天正年間（一五七三—九二）に一旦焼失しており、墨滅された「龍門寺公用」識語との關係も判然としないため、その後の伝来は不明である。識者の教示を請いたい。『研究』未録。

松源和尚語錄二卷 附塔銘一卷

半
二册

宋釋松源崇岳撰 釋〔掩室〕善開等編（銘）宋陸游撰
至德四年（一三八七）刊 覆〔鎌倉末〕刊本

後補淺葱色表紙（二三・九×一五・五糎）左肩打付に「松源録（乾／至徳板（坤）」と書す。虫損修補。首に「松源和尚語録序／（中略）嘉泰三年十月回菴譙令憲謹序（書行）」、「（上略）嘉泰癸亥臘月八／日汲郡孟猷後序（行楷）」、「（上略）嘉泰三年癸亥／重九日住黃龍山法弟比／丘慶如謹書（行楷）」あり。

開光陸等錄、每章改行。

左右双辺（一七・九×一二・二糎）有界、每半張十行、行十九字。版心、白口、單線黑魚尾下小題、張數。本文末尾題「松源和尚語錄」。尾に「塔

銘／太中大夫寶謨閣待制致仕陸游撰／松源禪師名崇岳（下略）

(上略) 嘉泰三年癸亥重九／日住黃龍山法弟比丘慶如謹書(楷)、(楷)「臨濟
 十四世孫松源和尚語錄板留靈隱鷲／峰菴至元年間庵既回錄板亦隨燼衲子
 募／之而不可得然少林的旨東山正傳微此錄／不足以顯發當時之大機大由
 由是募緣重／刊以壽後世開學者之正見掃邪說之肆行／豈少補哉皆泰定三
 年二月初五日金陵鳳／臺法孫 比丘 清茂 謹書」記あり。次で「開
 板助縁／三貫文 善一／一貫文 善益 仁到／五百文 善海
 善稜／三百文 善鎮／ 善徑 見貞／ 道才／二百文 善裔
 通香 瑞音／ 法察 善厚 妙觀 奇選／ 允瀧 見燈／百
 文(隔三) 瑞包 善牧 善章／ 瑞綱 瑞喬 祖濟善研／ 瑞勤
 見珙 善祁 茲越／ 妙益 善憩 智堯 瑞曇／ 善董
 善祺 見陳 善心／ 禮智 善量 見弘 善權／ 瑞灌
 宏岷 圓鏡 淨曉／ 妙普 善協 瑞普 見勇／ 周門
 瑞萇 善改 見縱／ 瑞憲 瑞繁 崇怙 妙運／ 有英
 心鵬 正潤 善宗／ 善貞 瑞森 善聖 淨宣／ 見恢
 英仙 善球／五十文 善績 善景 善均／ 見長

■ ■ ■ 録本(一部) 瑞英／板木(隔三) 瑞洪(隔三) 至德(丁卯)第四中秋日」記を存す。

毎冊首に单边方形陽刻「石鼓軒／書画記」朱印記、毎冊尾に同「追蠡子
 ／鑑賞章」朱印記を存す。桐箱入り、蓋表面中央に「五山板松源録」(楷)、(楷)「
 (五老山人題箋)」墨識並に不明朱印記あり。大尾に「(楷)書林松月堂藏
 書」識語、夾紙して別筆にて「自至德四年丁卯至弘化／三年丙午
 四百五十九年」識語を存す(図9)。

臨濟宗松源派の祖師である松源崇岳の語録は、嘉泰二年（一二〇二）の示寂後、法嗣の掩室善開や少室光睦、運庵普巖、諸庵師肇、了能等が編集し、法弟の一翁慶如の校閲を経て、靈隱寺鷲峰庵で刊行した。しかし元至元年間（一二六四—九四）に回祿に遭つて失われ、泰定三年

(一三二六)頃に重刊されたという。松源派は元時代に、本書の泰定の跋を書いた古林清茂の幢下を中心に繁栄したため、日本からの留学業者や来朝僧にも、その語に親しむ者が多く、今日もとの宋元版は伝存しないが、鎌倉末に元版に基づく五山版が刊行され、一部に行われた。掲出の版本は、鎌倉末刊本のさらなる覆刻であり、本邦至徳四年(一三八七)の助縁刊記を伴っている。

本書の五山版について、従来鎌倉末刊本、南北朝刊本、至徳四年刊本の三種が著録され、至徳刊本には安田文庫旧蔵の一本が知られるのみ、当館蔵本は、既録の安田文庫本そのものに当たる。しかし、南北朝刊本とされる大東急記念文庫蔵一本や国会図書館蔵本と比較する限り、南北朝刊本と至徳刊本は同一の版種であり、該本の他には刊記を欠くために別版と見られたが、実際には鎌倉末刊本と、その覆刻である至徳刊本の二種を存するのみと思われる。

その上で、本版の特色を述べると、前版にはなかった陸游撰述の塔銘を附刻した点が、本文上の最大の変更であろう。陸游も松源の教化を受けた直弟の一人である。この部分は、従来の「南北朝」刊本にも附録されている。他本にない至徳の助縁刊記は、総額十四貫と百文に上り、施財者の末に三分の墨釘を残す等、開版時の状態を伝える。助縁者名の殆どは伝不明であるが、善を系字とする者が頗る多く、善益、善牧、善宗の三名は、大林善育の系譜下に見える。大林は松源、掩室の法系に連なる入宋僧無象静照の嗣で、後世に言う法海派を構成し、南禅寺正宗菴に塔した。この派に本書の重刻を試みることは十分あり得ることであり、後日の追証に俟ちたい。なお、従来の著録では該本序の版心下に「工名良甫」記を存する由であるが、現在は確認することができない。

大尾の識語に見える「書林 松月堂」は、禅籍をよく扱った京の書肆小川源兵衛であろう。

佛鑑禪師語録二卷 附徑山無準和尚入内引對陞座語録 徑山無準禪師行狀各一卷 大 三冊

宋釋無準師範撰 釋宗會等編

(入)釋了南等編 (行)釋無文(道)璨撰

應安三年(一三七〇)刊(京)天龍(寺)金剛禪院(春屋)妙葩

覆(鎌倉末)刊本

後補蓮華唐草文空押艶出丹表紙(二五・四×一五・七糎)、押し八双。右下方に後筆にて「天(地人)」と書す。破損、虫損修補。見返し新補。

巻首題「佛鑑禪師初住慶元府清涼禪寺語録」(格低八)侍者 宗會 智圻

編「毎節改行。本文末に」(格低四)大丞相游公祭文(宋淳祐九年游侶あり。

左右双辺(一七・五×一一・三糎)有界、每半張十一行、行二十字、歐陽詢体。版心、白口、單黒魚尾下小題、張数。左肩耳格、全編一通の張数を標す。尾に「徑山無準和尚入内引對陞座語録」(格低七)侍者「了南了根」編、「(格低三)徑山無準禪師行狀」(墨圓及線)榮無文撰(師諱師範(下略)」を附す。行狀末より隔一行、低二格にて「此録舊板已漫滅茲者命

工重刊置」于龜山金剛禪院伏願(佛種不斷世世建光明幢祖印親傳(人人開無盡藏(應安庚戌季夏天龍東堂(比丘妙葩)題」記あり(図10)。

〔彭叔〕朱筆にて標傍韻圈、豎傍句点、稀に同墨欄外標補注書入、〔近世初〕墨筆にて欄外行間等に間々片仮名交り補注書入を存す。大尾に〔彭叔〕筆にて「永正第八辛未四月十一莫以雲岫西堂之本寫朱句畢仙廿二載

／雲岫本云 右朱句以宝渚大和尚本寫之 文卯仲槐廿九挑灯功畢」墨識あり。第一、三冊首に單辺方形陽刻「芬陀院」(東福寺芬陀利華院所

用)朱印記、同「不二庵」記、每冊首に同「靈雲院」朱印記(以上二類、東福寺靈雲院所用)、第二、三冊首に方形陰刻「彭叔」朱印

記(彭叔守仙所用)、單辺方形陽刻「積翠軒文庫」(石井積翠軒所用)朱印記、双辺同「小汀文庫」朱印記(小汀利得所用)を存す。

臨済宗破庵派の宗匠無準師範は、徑山万寿寺に住持して足下に数多の龍象を打出したが、入宋した東福寺開山の円爾、来朝した兀庵普寧や無学祖元の師でもあり、無学の系譜下に中世後期最大の勢力を誇った夢窓疎石の流派を生んだから、その言行は日本でも殊に重視された。無準の語録は、宋淳祐九年（一二四九）の示寂後、宗会、智圻、鏡堂覚円、如海、断橋妙倫、環溪惟一、了禅、了心、月坡普明、了南、希叟紹曇等によって速やかに編集版刻され、日本にも将来されたと思しく、現に東福寺開山塔である普門院旧蔵の宋版本を宮内庁書陵部に蔵する（五五六・五七）。

日本では稀観の宋版の他、これに基づく五山版二種も行われたが、その一は、五山版開刻の当初に版刻された鎌倉末刊本で、明徴はないが、正応年間（一二八八―九三）に東福寺周辺で刊行された虎丘派、破庵派の祖師の語録と同款式で開刻された。そして南北朝を迎え、洛西に本拠を築いた夢窓派が隆盛になると、五山版の重心も嵯峨の地に移ったが、夢窓を開山に仰ぎ、実際は春屋妙葩の経営した天龍寺は、特に出版に積極的で、開山塔の雲居庵や、春屋の塔所金剛院を中心として、二十数種の版本を発行している。中でも春屋は、無準以来の法系を重視し、東福寺で開版した虎丘派、破庵派祖師の語録を軒並み覆刻、応安三年（一二七〇）に本版を刊行した。今日、同版本に国立国会図書館蔵本、お茶の水図書館成實堂文庫蔵本、天理大学附属天理図書館蔵本、阪本龍門文庫蔵本、東洋文庫蔵本も知られる。

該本は、その鈴印に拠り、東福寺の塔頭に伝来したものと知られる。芬陀院は芬陀利華院の略で、一条経通を開基とする定山祖禪の塔所から発展した院家、不二庵は、やはり一条家の帰依を受けた岐陽方秀の塔頭で、文明五年（一四七三）に靈雲院と改称した。そして、本書に加えられた朱点と若干の墨注は、大尾の永正八年（一五一二）識語等に拠り、靈雲院に住持した彭叔守仙の筆と認められる。朱点そのものは彭叔の創

見ではなく、靈雲院の先輩に当たる雲岫守端（釋）が、文明三年辛卯または十五年癸卯に、雲章一慶の点を写した本に依る。雲章もまた聖一派の僧で東福寺宝渚院に退休したが、俗系は一条経嗣男、兼良の庶兄であり、岐陽の指導を受け声誉の高かった学僧でもあるから、その解釈は彭叔の関心を捉えたであろう。室町期に天龍寺版の『仏鑑録』が聖一派の諸院で用いられた情況も注意される。

禪林類聚二十卷

元釋道泰等編

大 二十冊

貞治六年（一三六七）刊（京臨川寺（東岡）希杲）

〔覆〕元大徳十一年（一三〇七）序刊本

古繹色艶出表紙（二五・二×一五・九糎）毎冊左肩に古題簽「禪林集（類目／類目）」或いは同工の後補題簽を貼附す。左下方に冊数を書す。首冊のみ右肩打付に「首尾廿冊」と書し、その上、右肩隅切りの方簽に「（全廿）月九十二」と墨書、双辺方形陽刻「西莊文庫（書）_{（楷）}」印記朱鈴蔵書票（小津桂窓所用）を貼附す。下小口に安田文庫「_{（書）}古板26」整理票を附す。首に「禪林類聚目録」を附し、行を接し低四格にて「（上略）編寫既辦善俊遂抽衣資中統寶鈔參／拾錠白米貳拾碩天寧常住當住助米肆拾碩發揚／鏤板印行以備湖海檢尋之便淮東諸山目擊／是緣各捐己資共成厥事題名卷末大徳十一／年歲次丁未佛誕日揚州路天寧萬壽禪寺住／持嗣祖比丘善俊謹書」とあり、次行目録尾題下に「○貞治六年（丁）未／解制日幹縁僧希杲重刊于京臨川寺」記を存す。

卷首題「禪林類聚卷第一／_{（格低五）}」（揚州雍熙禪寺住持嗣祖比丘道泰天寧禪寺首座比丘智境集）／_{（下小四格以）}／_{（格低七）}（帝王）、毎章改行、末尾に出処或いは校注（_{（小字）}、_{（双行）}）、間と一格を低し拈語、毎編改張。

左右双辺（一九・三×一二・七糎）有界、毎半張十二行、行二十二字、趙松雪体。版心、線黒口、単黒魚尾下題「類聚幾」、間と直下に施財記、

張數。下象鼻前半側に原刻工名。工名、揚(易)、於、陶秀、趙(肖)、朱、陳(東)、張(長)、木、春、上、エ壽。尾題同首。卷五尾「一等／普覬、卷九尾」「泰興縣禪林禪寺住持嗣祖比丘法宗施中統鈔壹錠」(格四)孤山禪寺住持嗣祖比丘法涇施中統鈔壹錠、卷十一尾「泰州東禪禪寺住持嗣祖比丘德隆施中統鈔壹錠半」原刊記を存する上、以下の施財記あり。(卷二)第一張版心(以下「一」等と略記)「壹貫文太虚和尚」、五「壹貫文希杲」、九「壹貫文永模」、十三「五百文省燈」、十五「五百文中鏘」、十七「壹貫文可出」、十八「壹貫文祚禪」、十九「壹貫文道助」、二十「壹貫文梵鏡」、二十一「叁百文道譽」、二十二「式百文梵樟」、二十三「二百文良妙」、二十四「式貫文玉泉和尚」、二十五「式貫文昌回」、二十六「式貫文昌山」、二十七「式伯文令瓊」、二十八「五百文周仲」、二十九「一百文中瑩」、三十「式貫文周倍」、三十一「百文可椿」、三十二「三百文慈寛」、三十三「百文可傑」、三十四「式貫文彦貞」、三十五「一貫文良永」、三十七「式貫文行廣」、三十八「式貫文昌明」、三十九「百文祥英」、四十「百文中派」、四十一「百文祥悟」、四十二「百文中綱」、四十三「百文妙項」、四十五「一貫文大同」、四十六「百文周芳」、四十九「式貫文周旭」、五十「百文道賢」、五十一「百文昌勝」、五十二「百文昌超」、五十三「百文道立」、五十四「壹貫文周旭」、五十五「一丁周檀」、五十六「拾貫文圓桂」、五十七「百文慶禪」、五十八「壹貫文明應」、(卷二)「三百文周懷」、二「各百文(祐曉 重阿/資奉 實忠)」、三「各百文(家吉 道直/景直 方曇)」、四「二百文兼阿」、五「三百文觀阿」、六「三百文常冲」、七「五十文乙女」、八「廿八文東勝」、九「廿文行長」、十「各百文(中良 右巽/梵瑚 昌昂)」、十一「一貫文周佐」、十二「二百文中疎」、十三「百文妙勵」、十四「一貫文大照」、十五「百文永栢」、十六「一斤志書」、十七「一斤希禽」、十八「一斤永貴」、十九「一斤中貊」、二十「二斤中良」、二十一「三百文聖丘」、二十二「二斤權芳」、二十三「二斤右宗」、二十四「二斤周景」、二十五「二斤以縦」、二十六「二斤觀宣」、二十七「二斤中秘」、二十八「二斤周恕」、二十九「二斤中璫」、三十九「馬一疋崇永」、四十「馬一疋崇縁」、(卷四)九「馬一疋道階」、卷十八第二十三張後半に一格を低し「慈光 妙昂 中璜 中存 中慎 昌寅 昌倫/中貺 慶印 中益 中坦 中錦 興聖 中柔/宗曇 梵津 周春 燈裔 昌秀 建孝 明父/明輝 梵綱 右昊 權芳 集文 昌仁 中端/淨慧 友照 寶舜 梵伊 心頊 昌珎 中倫/周恢 常圭 周愚 理秀 良恭 元禮 元摸/元鑒 元信 良清 良秀 良倫 良蓀 昌貞/昌建 梵省 周楨 中立 昌宗 良順 昌健/中福 周復 昌瑞 道宗 自能 昌隨 宗鐸/梵苑 昌濡 恕忠 中毅 中言 等衷 元謁/右儉 志諸 永春 梵傲 妙裔 壽正 良薰/助縁各伍拾文」、(卷十九)第四十六張後半「梵傑 明宥 中徹 周喆 壽皓 集要 梵從/中光 永訥 永邃 受震 瑞普 中頓 中防/昌鞠 昌琳 梵珠 中祥 梵三 昌禪 梵融/歡琛 昌信 昌嵩 梵英 昌和 信攸 中快/阿翰 昌與 周初 友聞 乾濟 祖傳 梵西/中賢 昌恪 中然 昌秀 梵知 壽音 梵皎/梵隆 梵諸 祖月 全湛 中明 明圓 超穎/昌燈 中觀 禪博 寶陽 梵杲 周伊 周昇/中照 是靜 中圓 周觀 得妙 昌忍 中恕/各五十文」、第五十一張後半「前住長樂住持比丘良初 助縁五百文/良光 普禮 之純(格四)各三百文/祥真 昌玖 各二百文 梵進 元稠 各百五十文/中舉 中亮 見初 中誠 周濃 中貞 中雄/昌濟 本祐 得美 梵楨 道秀 中燈 梵資/昌燈 昌為 普薰 開謹 祖識 昌雄 義鑒/集易 梵雲 各百文/(釘墨)」、(卷二十)八前半「五百文周樞」、後半「周真 道榮 捨錢各三百文/周昭 通陽 中嵩 中穩 周伸 智麟 昌壽/禪慶 元潮 中霽 中芳 昌慧 道悟 寂椿/呂廣 永納 本提 道聖 捨錢各佰文/昌璨 一爻 中勝 中德 性曉 常宗 周興/志哲 昌春 本歸 紹杲 祥芳 道閭 道超/侑僊 本遇 法增 中真 本逾 中燈 梵駿/道可 周證 昌苗 周愚 周拙 有付 良杲/梵究 梵舜 普文 中頊 中寧 周廣 昌曇/梵椿 桂曇 榮曇 普秀 知有 中晃

知全／章敏 有茂 昌全 中式 梵堅 梵超 中亮／通行 侑弥 明圓
全湛 超穎 昌穆 周中／喜平 阿梅 妙越 中孚 梵誠 中翰 阿漸
／梵友 阿玉 中矩 中習 呂文 中榮 梵楞／妙宜 初鎮 光聞 原
泰 昌了 好稟 昌松／喜藝 承慶 昌燈 玄尊 梵琳 昌益 昌宏／
助縁各伍十文、十七後半「周洞 中河 中淹 周訢^(格四)」助縁各三百文
／常恩 昌聞^(格四)助縁各二百文／善師 阿聰 中初 周應 中間 中
巍 中遇／中劬 周鼎 義鑒 中義 光瑞 梵宥 妙周／妙果 昌明
正禪 良春 至靖 清疑 道助／梵樞 中燈 至先 曇澍 周興 可昂
士鈞／梵智 昌源 禪椿 昌憲 道欽 梵支 梵金／昌浩 中果 昌宗
梵伯 梵秉 昌淳 昌禎／昌盛^(格四)助縁各百文／昌純 昌軫 祖益
本玉 周令 梵珠 助縁五十文、大尾「前南禪住持比丘周澤 助縁
伍貫貳佰文／天龍禪寺住持比丘法序 助縁壹貫文／前圓覺住持比丘大闡
助縁壹貫文／臨川禪寺住持比丘周應 等持禪寺住持比丘周郁／前安
國住持比丘延芳 前等持住持比丘周佐／前慧林住持比丘周倍 前棲
賢住持比丘圓熙／ 助縁各伍佰文／前補陀住持比丘慧迪 前妙光住
持比丘世雄／ 助縁各參佰文」。また僅かに刻工名あり。卷十七第三
十六張後半、卷十九第一張右辺外「夜叉」、卷十九第四至七張左辺外「長
有」。この他、卷十二第四十九張後半には顔相戯刻あり。
朱合堅傍句点、標傍圈、標鈎、稀に欄上標注、行間補注校改書入。稀に
別手〔江戸前期〕朱筆にて返点、連合符、音訓送仮名、傍線、欄上音校
注〔用「會元」〕書入。毎冊尾欄外に一行数字の墨書刪去痕あり。毎冊首
に单边方形陽刻「即宗院^(書)」朱印記〔東福寺即宗院所用〕を存す〔図11〕。
大徳十一年（一三〇七）善俊の序に拠ると、揚州天寧寺の住持善俊は、
諸家の語録に散在する仏祖悟入の機縁や拈頌を集成分類したいと願って
いたが、同寺の首座智境も素願を同じくすることがわかったため、徒弟
の雍熙寺の住持道泰に委嘱して共編させたものが本書で、主題や関連の
事物に従い一百二門に分類された機縁の詞章を集成する、禅僧の龜鑑で

ある。これを、善俊個人と天寧寺の資産を投じ、関係寺院住持等の喜捨
を集めて開刻し、版本が流布された。現在日本に大徳の原刊本も伝存す
るが、より広く我が国に行われたのが、貞治六年（一三六七）刊行の掲
出の版本である。

本版は、嵯峨臨川寺の東岡希杲が中心となって実現された、当時の代
表的な出版の一である。臨川寺は南北朝に興隆した夢窓派の度弟院であ
り、東岡もその徒。彼は南禪寺に於ける来朝僧竺仙梵僊の『古林和尚語録』
他の出版に関与し、その意義と方法を学んでこの壮举を起こした。⁽¹³⁾開版
に当たっては、同門の僧徒から広く施財を集めて本書を流布し、一門の
振興を図った。本版の柱や巻末には施財者の名と施財の額が詳細に列挙
され、その規模が知られる点は特異であり、のべ四百二十六名（二十一
例の重複を含む）より、総計七十七貫文を上回る多額の寄附が行われ
た。⁽¹⁴⁾このうち道号法諱の判明する者は比較的少数で、無求周仲、無等周
倍、菊溪周旭、空谷明応、徳叟周佐、茂林周春、三洞昌秀、此宗周恢、
子春梵苑、俊茂中快、極先周初、季照中明、無伝昌灯、月潭中円、如心
中恕、独鼎中举、翠岩周濃、祥庵梵雲、月山周樞、中山中嵩、密伝中穩、
無已道聖、松蔭常宗、曇芳周広、在中中淹、桂堂昌聞、曇芳周応、即宗
中遇、霜林中果、龍湫周沢、不遷法序、大法大闡、元章周郁、大照円熙
の三十四名、みな夢窓の直弟か法孫である。その他も、中、周、昌、梵
の系字を受ける者が多く、夢窓門派の僧と推される。

本版はまた、来朝刻工の関与した出版としても知られ、後に目録の補
刻が行われ、目尾の貞治刊記の下に「〔孟榮〕刊施」の語が加えられた
のを見ると、『翻訳名義集』の項に前述した陳孟榮等が手を貸している。
ただ従来、一旦完成の後に来朝刻工の補刊があったと考えられ、実際に
目録の四張に関しては、「孟榮」刊記のない原刻と、刊記のある補刻の
両者が通行し、後修本が区別される。しかし、巻中別に存在する「夜叉」「長
有」の工名附加は、必ずしも補刻の結果とは断定できない。これらの工

名は、大徳の原工名と明確に区別される上、長有は、刊年不明の『韻府群玉』や、永徳二年（一三八二）刊行の『仏海禪師語録』にその名が見え、来朝刻工集団の一員と見なされるのに、本版の初印とされる安田文庫旧蔵の当館蔵本を始め、諸本に等しくその名を存するため、これらの張を補刻と考えることには不審がある。本版刊記の時点である貞治六年七月十五日は、刻工集団が嵯峨に到着した同月二十一日の直前に当たるから、刊行が少しく遅れ、その段階から到着直後の刻工が関わったと見れば、開版の当初からその協力があつたことになり、補刻とは言えない。この問題は版本の微妙な修印の状態に対応するから、なお証本の精査を要する。

未修の同版本に国立国会図書館蔵本、布施美術館蔵一本、天理大学附属天理図書館蔵本、後修本に慶應義塾図書館蔵本、東洋文庫蔵本、布施美術館蔵一本等がある。これに対し、該本は近世まで東福寺即宗院の旧蔵であつた。同院は島津氏久を開基とし、開山剛中玄柔の塔所とされた。東福寺塔頭から小津桂窓の手に移り、安田文庫に渡った経緯は、前述の『祖庭事苑』の場合と同じである。

月和尚語録二卷

元釋月江〔正印〕撰 釋居簡等編

〔應安三年（一三七〇）〕刊

新補淡茶色表紙（二七・一×一八・一糎）左肩鈍色（茶色唐紙）題簽を貼布し「月江語録（乾（坤））」と書す。右下方に貼紙し「天龍寺慈濟院舊藏／〈元釋正印號月江著〉」と書す。襖紙改装。見返し、前副葉新補。次で素表紙、左肩打付に「月江語録（乾（坤））」と書す。首冊のみ右肩打付に「呂（^書）」と朱書し、題下に単辺楕円形陽刻「慈濟院（^書）」朱印記あり。首に「育王月和尚語録／叙／（中略）至元六年／庚辰歲三月龍翔住／山比丘大訢拜書（^書）」、「月和尚語録序／（^格）前雞足山師弟

大 二冊

比丘〔正澄〕述／（中略）歲時至治三年癸亥／孟陬日」を附す。巻首題「月和尚初住常州路碧雲禪寺語録／（^格）平江路太平禪寺住持門人〔居簡〕編、毎節改行。

左右双辺（二九・五×一二・四糎）有界、毎半張十行、行二十字、趙松雪体、写刻。版心、細黒口、双線黒魚尾（^向）問題「語録（下）」、張数、間と上象鼻に大小字数、下巻の下象鼻に工名あり。工名、良甫、彦明。尾に「（上略）／丁巳夏四月六日東林／辱弟紹義敬題（^行）」（末張後半陰刻部を刷らず）、「（上略）皆至治二年夏五／澹湖（清茂）題（^行）」、「（上略）至治／壬戌夏首淨慈（德海）／敬題（^行）」、「（上略）前淨慈屬末靈石（如芝）書（^行）」を附す。

朱豎傍句点、傍線、墨欄上標注書入。毎冊首に単辺亜形陰刻「慈濟」朱印記、毎冊尾に單辺方形陽刻「三／晉」朱印記、毎冊首に双辺方形陽刻「小汀文庫（^書）」、毎冊尾に竹根形陽刻「を／ばま」朱印記（以上二顆、小汀利得所用）を存す（図12）。

本書は至治年間（一三二一—一三三）の序跋が寄せられる等、月江生前から編集が進行したが、笑隱大訢の序に「比者其徒如月以師語録示余」とあつて、最終的には至元六年（一三四〇）頃までに現在の形となった。上巻に碧雲寺から阿育王山広利寺までの七会と頌古、下巻に告香普説から題跋に至る諸編を収め、碧雲語は居簡、澱山語は妙心等と、それぞれ別個の門人が纏めている。頌古以下は殆ど編者を示さないが、偈頌のみは自成編と署する。もとの元版について、丁丙收藏『八千卷樓書目』巻十四に「月和尚語録十一卷（元釋居簡編 元刊本）」を録するが、その伝存を聞かず、分巻が異なるのか、編集自体が異なるのか、不明。

当該の五山版は、間と版心に工名を存するが、良甫は前出の『翻訳名義集』と、後出の『唐柳先生文集』をも刊出した来朝刻工の兪良甫である。彦明も、姓氏は不明ながら、応安四年（一三七二）陳孟榮刊行の『宗鏡録』や、永和二年（一三七六）刊『集千家註分類杜工部詩』、刊年不明

の『韻府群玉』開版に従事しており、同じ刻工集団の一員である。そして、該本と同版の別伝本には、後附の東林紹義の題末に陰刻左文字にて「良甫自刊月江語録下集通／計板七片紙大小字該三十張數／應安三年六月初旬謹題六應」三行の刊記が印刷されている。これに拠り本版は應安三年の刊行と認められ、貞治六年（一三六七）着岸の来朝刻工等が関係した、初期の版本とわかる。但しこの刊記はしばしば刷られず、左右反転の陰刻である点からも、版木を扱う事業者か施主に向けて書かれたものであり、広く読者に向けて述べたのではない。その内容も部分的な彫版の担当を述べるのみであって、後出の『唐柳先生文集』のような良甫刊本とは性格を異にし、愈氏の計画で版刻されたとは言いえないようである。

右の刊記は、出版技術史の面からは注意すべき点があり、愈氏は自らの担当分を「七片」「三十張」と述べている。この他、下巻版心下象鼻に見える工名の出現をたどると、「彦明」は第七至十二、十九、二十一、三十一、三十三至三十五、四十八至五十二、五十六至五十七の計十九張、「良甫」は第十三至十八、三十七至三十八、五十三至五十四、六十至七十一の計二十二張である（下巻と題跋の通計は八十六張）。このうち、第七至十二、第十三至十八、六十至六十五、六十六至七十一張は、『翻訳名義集』の項に述べたように、六張一版を単位と見れば、版木四片に相当する。そう仮定すると、第三十六張までは六張一版と見て矛盾ないが、第三十七から四十六張の間は十張で六の倍数に不足、四張一版の版木を含む可能性があり、第五十三から五十九張の間には、奇数張の版木を含まなければならない。実情は不明とする他ないが、片面三張の使用も交えたのであろう。もしそうであれば、良甫顕名の二十二張は五片に相当し、他に二片八張前後の刊版が潜在すると考えれば、平仄が合う。いずれにしても、来朝刻工の彫版と六張一版（三張掛け）の版本に深い関係のあることが確認される一方、六張一版とは原則であって、板材の

事情等に応じて伸縮することも見出された。

同版本には他に、宮内庁書陵部蔵本、お茶の水図書館成實堂文庫蔵二本、大東急記念文庫蔵本、建仁寺西足院蔵本がある。これに対し該本は、鈴印から慈濟院の収蔵とわかる。慈濟院は天龍寺に附随する嵯峨諸院の一、夢窓の直弟で天龍寺の第二世となった無極志玄の塔所である。来朝刻工等は、嵯峨に在住して彫版に従事したとされるから、刊刻の現場に近く伝来した版本である。『研究』未録。

圓通大應國師語録附塔銘

大 一冊

釋南浦紹明撰 釋祖照等編（銘）釋明釋（懶庵）廷俊撰

應安五年（一三七二）刊（西京龍翔禪寺〔滅宗〕宗興）

後補栗皮表紙（二五・二×一六・七糎）左肩梅花図藍印題簽を貼布し「大應語録〔應安板〕」^{（墨書）}「六（別手）八ノ四二（傍書）」と書す。右肩隅切りの方簽に「月八十六（全一）」と墨書、双辺方形陽刻「西莊文庫」^{（楷書）}「印記朱鈴藏書票（小津桂窓所用）を貼附す。下小口に安田文庫」^{（楷書）}「古板45」整理票を附す。前副葉後補。首に「日本國建長寺明禪師／語録叙／（中略）洪武八年倉龍乙卯／五月十有九日戊寅天／界善吾禪寺住持天台／釋宗泐叙」^{（書）}を附す。

卷首題「圓通大應國師初住筑州早良縣興德禪寺語録／」^{（低）}侍者 祖照等編、毎節改行。

左右双辺（一八・四×一二・四糎）有界、每半張十一行、行二十字、歐陽詢体。版心、白口、单黒魚尾下小題、張數。尾に「圓通大應國師塔銘／」^{（低）}杭州路中天竺天曆萬壽永祚禪寺住持廷俊撰／（中略）國師諱紹明字南浦駿州安部縣人（下略）」を附す。塔銘の末張後半に隔一行、低二格にて「時應安五年歲次壬子冬十二月十五日／西京龍翔禪寺住持法孫比丘宗興命／工入梓／前妙興禪寺住持法孫比丘性守助縁／前真如禪寺住持法孫比丘宗任同助／筑州聖福禪寺住持法孫比丘宗越同助／前崇福禪寺住

持法孫比丘宗璨同助」記あり、次行墨釘。また「（上略）／／洪武三年歲在庚戌／佛制日／雙徑山主智及拜題（書行）」、「（上略）時元德庚午孟／夏結制前五日建長住／山法姪比丘（楚俊）敬跋（書楷）」、「（上略）時文永壬申／季春／大宋國屬末比丘西澗（子曇）（書行）」を附す。

朱標圈、豎句点書入。代赭色不審紙。首に方形不明朱印記（朱滅）、単辺方形陽刻「宗／俊」朱印記、大尾に双辺楕円形陽刻「桂窗」朱印記（小津桂窓所用）を存す（図13）。

本邦臨済宗大応派の祖となった南浦紹明は、初め建長寺の蘭溪道隆に就き、入宋して松源派の虚堂智愚の下で大悟、文永四年（一二六七）に帰朝し、虚堂に嗣法して興徳寺、崇福寺、万寿寺、建長寺に入院し、後宇多法皇の帰依を受け、延慶元年（一一三〇）に示寂。大応国師の勅諡号を得た。本書は上記の四会の語録に法語、偈頌等を加えたもの、師に随侍した祖照、慈禅、宗心、克原等の編集に係る。

刊者の滅宗宗興は、南浦寂後の延慶四年（一一三二）生れで、建長寺で柏庵宗意に学び南浦に拜塔嗣法した僧。尾張妙興寺を開創した後、後宇多法皇が南浦寂後に離宮を改め、南浦を開山として創始した京の龍翔寺に住し、本版を刊行した。その首に明洪武八年（一三七五）天界善世禅寺の季潭宗泐の序を冠するが、季潭は、『金剛経註解』の項に述べた通り、明初禅宗界の首班であった。他に洪武三年の明僧愚庵智及や、来朝僧西澗子曇、明極楚俊等の序跋を集めている。なお大応派は、中世後期以降、五山派と一線を画する活動を展開したが、出版物の様式上には相異がなく、五山版の一として取り扱う慣習である。

龍翔寺は後に、南浦直弟の宗峰妙超が興した大徳寺に附属されたが、その資産も同寺に引継がれ、本版は寛永十七年（一六四〇）大徳寺で沢庵宗彭等に依って補刻再印された。しかし当館蔵本は、それ以前の早印本である。同様の伝本には国立公文書館内閣文庫蔵本、大東急記念文庫蔵二本、東洋文庫蔵二本、お茶の水図書館成實堂文庫蔵二本、国立国会

図書館蔵本等がある。該本に鈐印した宗俊も大応派の僧と思われるが、不明。近代の伝承は『祖庭事苑』『禅林類聚』に同じであろう。

天龍開山夢窓正覺心宗普濟國師年譜 附塔銘

半 一冊

釋〔春屋〕妙葩撰（銘）釋〔東陵〕永璵撰

〔南北朝〕刊

後補墨染表紙（二二・〇×一七・五糎）左肩題簽を貼布するも無文。天地截断、虫損修補。

卷首題「天龍開山夢窓正覺心宗普濟國師年譜／（格低七）臨川禪寺住持小師

〔妙葩〕編、毎年改行。

左右双辺（一八・九×一四・六糎）有界、每半張十一行、行二十字、趙松雪体。版心、小黑口、双黒魚尾（不對）、上尾下題「譜」、下尾下張數。尾に「西山夜話」「臨川家訓（畧出）」（以上総題せず、張數一通）、「天龍開山特賜夢窓正覺心宗國師塔銘（并序）」／前瑞龍山太平興國南禪禪寺住持四明沙門永璵撰」を附す。

首三葉欄上に墨識を存するも、截断。首に単辺方形陽刻「春翠／文庫（楷録）」朱印記（中島仁之助所用）、同「小汀氏藏書（書楷）」、尾に双辺同「小汀文庫（同）」朱印記（小汀利得所用）を存す（図14）。

鎌倉末期に顕れ、南北朝に一世を風靡した夢窓疎石の年譜。俗甥にして法嗣の春屋妙葩が、観応二年（一三五二）の夢窓寂後、文和二年（一二三三）に編集した。本書の末尾に来朝元僧東陵永璵の撰文に依る塔銘が附されるが、春屋の『年譜』は元来、その執筆を依頼するために編まれたとされる。¹⁷⁾東陵はこの年、足利直義の招きに依って来朝し、示寂の数日前に夢窓と面談、その委譲を受けて天龍寺の第三世となった僧であり、春屋はその天龍寺開山塔の雲居庵を護っていた。春屋は他の官寺に出世しても雲居庵主の地位にあり続け、この際にも臨川寺住持を兼ねている。本版附巻中の「西山夜話」は、春屋が夢窓の談話を留めた内

容である。

臨川寺は、建武二年（一三三五）に後醍醐天皇が建立した寺院で、上洛した夢窓を開山とした。その後、夢窓派の拠点として発展し、十方住持の官寺とはせず、同派の度弟院とされた。本版附巻の「臨川家訓」は、同寺に集う門弟の規律を定めた内容である。また天龍寺は、暦応二年（一二三九）に夢窓が発案し、足利尊氏、直義兄弟に、後醍醐天皇の菩提を弔うために築かせた寺院で、自らはその開山となっている。しかし晩年は臨川寺に退き、その末期を同寺開山塔の三合院で迎え、実際同所に塔したのであるが、髪と爪は天龍寺開山塔に納めており、春屋の年譜と東陵の銘は、後者のために書かれたもの。銘を刻んだ塔そのものは、文和三年に春屋の差配で建立されており、本版の刊行も、これ以降のことである。なお、三合院の塔所に刻まれた碑銘は、明の宋濂の撰文に掛かり、後年に完成された。

従来、本版は貞治四年（一三六五）の刊記を有する『夢窓正覚心宗普濟国師語録』と同時の刊行と見なされているが、⁽¹⁸⁾両者の版式字様は些か異なっており、実際に装訂や伝来を同じくする僚本を確認することができないため、刊行の年次を特定しなかった。『年譜』の同版本には静嘉堂文庫蔵本、お茶の水図書館蔵成篋堂文庫蔵本、岩瀬文庫蔵本、天理大学附属天理図書館蔵本、建仁寺両足院蔵本等がある。

【外典】

論語〔集解〕十卷

大 二冊

魏何晏撰

〔室町〕刊 無跋 覆正平十九年（一三六四）刊本

新補標色艶出表紙（二五・九×二〇・三糎）。下小口に「^(每字)改行 和泉本上

（下）」と書す。虫損修補。前後見返し、副葉新補。首に「論語序／（中略）尚書駙馬都尉關内侯臣何晏等上」を附す。

第三張後半首行に「論語學而第一^(格隔三)何晏集解（凡十六章）」と題し本文、句下夾注^(小字)、每篇改行。

单边（二・二×全張三五・七糎）有界、毎張十二行、行十三字。第六、七行間界線の右傍に巻数、張数を刻す。

朱豎ヲコト点、標声圈、清濁声点書入、別手句点書入、墨返点、音訓送仮名、欄上校注書入、別手行間片仮名交り補注（引「茂卿」「龍艸廬」説）

書入、胡粉、黄粉訓点改正書入あり。大尾題前に二格を低し「堺浦道祐居士重新命工樓梓／正平（甲／辰）五月吉日謹誌」墨書、その右肩後筆にて「（此条刊本ニアリ）」と朱書、旧見返し前半に同筆にて「右論語

同刻者世有三本日と泉本（即正平本也以偽朝年號／今諱避而不得稱摸以其）／（國／名）曰明應本（有跋尾／別記焉）曰無跋之本也（敬道）愚按無跋

尾之／本其原刻者^(補入)一^(字)歟不知是否姑記愚攷耳和泉本跋尾干支／當作壬辰蓋誤／（格低三）明和紀元之冬^(格隔三)平安 平敬道伯敷謹識」墨識、前方に

单边円形陽刻「稽古／主人」、後方に方形陰刻「平印／敬道」、单边方形陽刻「伯敷／別號／蘭丘」朱印記を副う。旧見返し後半に同筆にて「今

茲一書 夫子之遺言而／漢朝諸儒所註解也／寔是五經／之輶轄六藝之喉衿也天下為／民生者豈不仰其德矣哉／ 明應龍集己未仲種良日／

（格低三）西周平 武道敬重刊」墨書あり。毎冊首に大型円形不明図像朱印記、方形陰刻「審印／正□」朱印記、单边方形陽刻「秋月春風／樓磯氏印」

朱印記（磯淳所用）、同「聽冰壬／戌呂後所集舊／槩古鈔」朱印記、方形陰刻「三井／高堅／之印」、单边方形陽刻「聽／冰」「三井家雙籠閣^(書録)」

第一冊尾に方形陰刻「三井／高堅」、单边方形陰刻「好古／籠呂／求之」、毎冊尾に同陽刻「聽冰五十／五歳呂／後所得」、巻尾に同「高堅／所集」、

第二冊尾に同「三井高／堅□」、同陰刻每字有界「後天／皂堂」、新補箱蓋裏面に单边方形陽刻「高堅／所集」「三井家^(書格)」「大正十／三年所／

得古槧」朱印記（以上十二顆、三井高堅所用）あり（図15）。

所謂「正平版論語」の一種で、覆刻後印の無跋本に当たると。正平版とは本来は、正平十九年に泉南堺浦の道祐居士が、明経道博士家系統の旧鈔本を用いて開刻した『論語集解』の版本であり、日本に於ける儒経の刊刻として早期の例に属する。同本は、末尾に両項の識語を附刻することから双跋本と称されるが、同版の伝存は極めて稀で、現在では完帙の著録を見ない。この正平版初刻本には幾つかの覆刻があり、初刻の識語を一項のみ継承した単跋本、初刻のまま翻刻した双跋覆刊本、明応八年（一四九九）大内家中の杉武道が翻刻した明応版の三種、初刻本と併せ計四版種が知られる。このうちの前三版、もしくは四版を一括して「正平版論語」と呼ぶ習慣である。

「正平版」のうちの単跋本には、長享三年（一四八九）の識語書入を存する伝本があり、それ以前の版行と認められる。また単跋本には、正平の刊語を全て削り去った後印本があり、これは無跋本と呼んで区別されるが、掲出の当館蔵本はその無跋本に相当する。同種の印本には陽明文庫蔵本、お茶の水図書館成實堂文庫蔵本、前田育徳会尊経閣文庫蔵本、国立公文書館内閣文庫蔵本以下、多くの伝存がある。

この版本は、全部で百八十五張の印面を有するが、本文の系統が旧鈔本に淵源することと呼応して、宋元版様式の版心を有たない特色がある。これは直接には、もとの正平版の様式を引き継ぐものであり、旧鈔本の多くがそうであるような、卷子本の書写相を反映し、何晏の序と本文が連接して改張しない形にも古色を止めている。⁽²⁰⁾この版本には、もとの版本が一部伝存しており、現在は東京国立博物館に三十二片を収蔵する。この版本を見ると、大きさは概そ縦二〇・〇乃至二六・五糎、横八九・五乃至九六・七糎、厚さ一・八乃至二・五糎ほどある。毎版の表裏を彫刻（巻末では裏側を彫らない場合あり）、それぞれ十二行からなる印面を二張並列する長板で、毎張に数糎の空白を置き、摺刷上の便宜を図っている。

これは中世前期の卷子用の版本を基礎に、片面刷りの冊子を前提とする版刻に変化した、当初の姿を止めている。現存部分の様式から考えると、全て四十九片から成っていたと推計される。⁽²¹⁾

該本では、刊語を去った空白に、正平版以来の原刊記が転写してあり、同筆を以て明和元年（一七六四）の識語と鈴印を加え、さらに明応の刊記をも移録している。この識語は同系諸本の区別に関する考証を含み、和泉本（南朝年号の「正平」を避けてこう称する）、明応本、無跋本の三種を挙げ、無跋本を原刻と推論している。これらは跋尾の情況に注目し、正平の刊記を有する本、明応の刊記が加わった本、両者を欠く本と区別したのであろう。上述のように、版本に注目すれば、和泉本の中には三版が混在し、このうちの一版と無跋本は同版という関係にあつて、必ずしも適切とは言えないが、正平本論語研究の沿革を知る上で興味深い。この識語を記した平敬道について、詳伝を知り得ないものの、明応八年刊本『論語集解』の北野天満宮蔵本に、同じく「平安 平敬道士躋謹識」の語と「稽古齋圖書」の印記があり、家蔵書を北野社に献納する旨を述べているから、少なくとも無跋本と明応本を蔵し、明応の刊記を該本に移録した実情が知られる。その後、幕末には秋月の乱を主導した磯淳の手に渡り、三井家に伝来した。

韻鏡（序） 一卷 首一卷

大 一冊

闕名撰（首） 宋張麟之撰

〔室町〕刊

後補洪引表紙（二七・四×二二・二糎）左肩打付に「韻鏡」と書す。首張前半汚損。首に「（上略）余嘗有志斯學獨恨無師承既而得友人授／指微韻鏡一編（微字避聖祖／名上一字）且教以大略曰（中略）因撰／字母括要圖復解數例以爲沿流求源者之端（中略）聊用鋟木以廣其傳紹興辛巳七月朔三／山張麟之子儀謹識」を附す。右の末、行を接し七格を低して双

辺有界「慶元丁／巳重刊」牌記あり。次で「(花口魚尾)韻鏡序作(舊以翼祖諱敬故爲韻／鑑今遷祧廟復從本名)」(中略)嘉泰三年二月朔東浦張麟之序」「(同)調韻指微」「(同)〇三十六字母(格三)歸納助紐字」「(同)歸字例」以下凡例を附す。尾題「韻鑑序例」。

本文首張前半未刻、後半より本文「(花口魚尾)内轉第一開／唇／／音一清／次清／濁／清濁・〇〇風〇／〇〇豐〇／蓬〇／蒙〇／曹〇」以下本文、次張前半末行に「(格低三)・東(大字)」以下韻目。即ち見開き毎に一図。

四周双辺(二・七×一五・一)七音、四声毎に縦横有界、每半張十三行、行十九字。版心、小黒口(周接外)、双線黒魚尾(向不對)、上尾下題「勾竟」、下尾下張数。

大尾未刻部に「江戸後期」筆にて低二格で「韻鏡之書行於本邦久而未有刊者故轉寫之訛烏而焉焉而馬覽者多困彼此不一泉／南宗仲論師偶訂諸本善不善者且從且改／因命工鏤板期其歸一以便於覽者且曰非／敢擴之天下聊備家訓而已於戲今日家書／乃天下書也學者思旃(格低三)享祿戊子孟冬初一日(格低七)正三位行侍從臣清原朝臣宣賢(以下下格)頃間求得宋慶元丁巳張氏所刊之的本而／重校正焉永祿第七歲舍甲子王春壬子」と書し原刊語を移録す。首に単辺方形陽刻「寶玲文庫(書楷)」墨印記(フランク・ホーレー所用)あり(図16)。

本書は相對の韻字を一図に取り、七音を横に、四声を縦に列し、その交わる欄にさらに等位を区別して該当の文字を配列、四十三図からなる全体で漢語の音韻を表記した、極めて精密な音図である。『広韻』と同様の中古漢語の音韻を基礎としており、その淵源は唐代の翻經僧の活動に遡るとされるが、定かではない。現在知られる本文は、宋慶元三年(一一九七)丁巳の刊記を有つ宋版に基づいた、日本の五山版以下を存するのみ。もとの宋版本は紹興三十一年(一一六一)の張麟之の序を有するが、これに拠ると、友人から伝授を受けた「指微韻鏡」に、張氏が

序例を附して版刻すると言う。元來は「指玄韻鏡」と称したが、宋聖祖趙玄朗の諱を避け改称したと言ひ、また一時は翼祖趙敬の諱も避け「韻鑑」と称したというから、宋初以前に成立したものであるらしく、翼祖より七世以上を経た南宋時代に「韻鏡」に復したのである。刊記の慶元重刊本は、紹興頃の初刊本に拠るのである。たださらに「序作」には嘉泰三年(一二〇三)の年記があるが、これは増修を行ったものか、或いは全版を改め三刻したものか、不明である。

もとの宋版は伝を絶つてしまったが、本邦には室町期刊行と思われる五山版の他、近世にもなお数版がある。五山版の多くは最末に陰刻で永祿七年(一五六四)の校記を有することから、「永祿版」とされるが、実は先行する版本の永祿修本である。永祿修本は陰刻の刊記の前に低二格陽刻で、享祿元年(一一二八)戊子の清原宣賢の刊跋を有ち、享祿版の存在が予測されるが、実際に台北故宫博物院收藏の楊氏觀海堂本は、享祿の跋のみを存する未修本である。さらに龍谷大学図書館收藏の一本は、同様に補刻以前の版を止める早印本であるため、この版本が「享祿版」初印本と推定されている。ただ龍谷大学本は大尾第四十四張後半を印刷しておらず、享祿の刊跋はない。当館蔵本は、この龍谷大学本、所謂「享祿版」と同版で、稀少な早印本である。そして該本の大尾を見ると、刊跋はなく、その部分は未刻であり、当初は無刊記であつたことがわかる。因つて享祿版の呼称は、厳密に言えば適切ではない。

本邦では早くに本書の宋版本が将来され、伝写が為されて、鎌倉期以來、主に悉曇学の参考に供されたようであるが、南北朝室町期から、広く公武の間にも受容されて、元号や名字の吉凶を占うために応用された。こうした流行を受け、宮廷で漢字の使用に関わつた清原家でも本書が参考とされ、室町後半の版刻に繋がつていった。²³⁾なお本版では一図を態と二張に分割しており、底本に従つたのかも知れないが、片面刷り袋綴の造本を想定した版本である点も注意される。『研究』未録。

新刊五百家註音辯唐柳先生文集四十五卷 首目各一卷 特大四十七冊

唐柳宗元撰 〔宋魏仲舉〕編

〔嘉慶元年（一三八七）〕（丁卯）刊（俞良甫） 覆〔宋〕刊本

新補丹色表紙（三〇・五×二二・二）五針眼、香色包角。裏打改裝。原紙高約二六・七糎。前後副葉新補。首に「新刊五百家註音辯唐柳先生序傳碑記紀」、「新刊五百家註音辯唐柳先生文集目録」（第十四、十三張、第十八、十七張錯）を附す。

卷首題「新刊五百家註音辯唐柳先生文集卷第一／唐雅 唐詩 貞

符并序／（格低）獻平淮夷雅表一首／（格低四）」。句下夾注（小字）、「每篇改行。

左右双辺（二〇・一×一六・七）有界、每半張十行、行大十八字、小

二十三字。闕筆、貞桓。版心、中黒口、三黒魚尾（下二尾）、上尾下「柳

文幾」、中尾下張数。尾題同首。大尾題前下辺に單辺無界「祖在唐山福

州境界／福建行省興化路莆田／縣仁德里臺諫坊住人／俞良甫久住／日本

京城阜近幾年勞／鹿至今喜成矣／ 歲次丁卯仲秋印題」牌記あり。

〔室町〕朱合豎傍句点、傍韻圈、標鈎、校改、墨返点、連合符、音訓送

仮名、欄外校補注書入。また〔天隱龍沢〕筆にて朱墨補注、第三冊首に

原副葉、卷中欄外或いは貼紙上に朱墨片仮名交り細注書入。後者と同筆

にて每冊尾題前後に識語、第三冊「八月四日」、第四冊「八月七日」、第

六冊「八月十六」、第七冊「八月十八」「八月十五」、第八冊「八月廿日」、

第九冊「九月八日」「寛正四癸未四月」、第十冊「重陽」「寛正五（九を）

月一日」（朱）、第十一冊「重陽後一日 十」「夏五／十四」、第十二冊「九

月十一日」「六月十三日」、第十三冊「九月十四日」、第十四冊「九月

十七」「寛正未癸十一月十七日」（朱）、第十五冊「九月廿五」、第十七

冊「閏九月七日」「寛正五甲申五月廿九」、第十八冊「閏重陽」「寛正

（見補）申六（五）月三日」、第十九冊「閏重陽翌日十」、第二十冊「十一日」

「甲申六月九日」、第二十三冊「閏九月十二日」「寛正六酉五月十六」、第

二十四冊「閏九月十六」「寛正乙酉小春十五」、第二十五冊「閏九月廿七

日」「□西小春十□」、第二十六冊「閏九月廿九」「小春廿一」、第二十七

冊「十月二日」「小春廿五日自大雪祖忌同」（朱）、第二十八冊「小春十日」

「文正丙戌四月廿七」、第二十九冊「小春十一日」、第三十冊「小春十三日」

「四月廿八」、第三十二冊「十一月二日冬至夜半書之」「丙戌五月八日」、

第三十三冊「十一月十三日」「文正丙戌六月廿五日」、第三十四冊「十一

月十九日」、第三十五冊「十一月廿三日夜半」、第三十六冊「十一月廿五

日夜半明後日可上京」、第三十七冊「十二月初二日居東山夜半」、第

三十八冊「十二月五日」、第三十九冊「十二月八日」「明應九年二月又書

抄」、第四十冊「十二月十日夜」、第四十一冊「十二月十三日夜」、第

四十二冊「十二月十六日夜半明日立春／始于長祿四年庚辰七月之季終于

十二月十六日添潤九月則凡七ヶ月也／自廿三卷至三十四卷在播書之

三十九歳」。縹色不審紙。書腦丁合墨書。每冊首に單辺方形陽刻「松方

／文庫」朱印記（松方正義所用）を存す（裏打紙に掛く）（図17）。

本版は、柳宗元の文集に対する諸注を南宋の魏仲舉が集め、慶元六年

（一二〇〇）に刊行した『五百家註音弁唐柳先生文集』に基づき、少し

く改変を施して重刊した宋版『新刊五百家註音弁唐柳先生文集』を、さ

らに覆刻した版本である。²⁴新刊本の宋版は、卷十六至二十一、三十七至

四十一を存する鉄琴銅劍楼旧蔵の殘闕本が、北京の中国国家図書館に伝

存するが、その他の巻については、この五山版のみがその本文を伝えて

いる。但し註²⁴の太田亨氏の研究に拠れば、本版の本文には、別行

の『増広注釈音弁唐柳先生集』と校合改訂した痕跡があり、一方で本版

特有の誤文も少なくないとされる。

刊者の俞良甫は来朝刻工集団の一員として従来著名の者であり、貞

治六年（一三六七）七月に来航し、同二十一日に京都嵯峨の地に入って、

活動を開始した。²⁶俞氏はその中でも殊に有力とされ、早くも応安三年

（一二七〇）に『月江和尚語録』の一部を手自ら刊刻、同五年に『碧山

堂集』、同七年には『白雲詩集』の彫版を喜捨し、本文大尾に「中華大

唐兪良甫學士」とその名を顕している。そして、よく知られる通り、至徳元年（一三八四）『伝法正宗記』の施財刊記に「福建道興路莆田縣仁德里住人兪良甫、於嵯峨寓居、憑自己財物、置板流行」と、また本版には「祖在唐山福州境界、福建行省興化路莆田縣仁德里臺諫坊住人兪良甫、久住日本京城阜近、幾年勞鹿、至今喜成矣。歲次丁卯仲秋印題」と記し、自らが福州南岸の沿海部莆田の出身であり、二十年に亘り嵯峨の地に住む事実を示す一方、無名の刻工としては終わらない意欲を見せている。前述の『翻訳名義集』や『月江和尚語録』の例からも、彼が実際に刻手を揮ったことは明らかで、筆翰のみを執る一般の士人に同様でないが、成版を施入して「中華大唐」の学士として顕名、職工を束ねる識者として振る舞った。本版も、この兪氏督刻のもとに完成された版本ということになるであろう。その顕名に従い、本稿でも刊者と著録した。

本版には比較的多数の伝本があり、陽明文庫、東北大学附属図書館、龍谷大学図書館、東洋文庫、国立公文書館内閣文庫、国立国会図書館、大東急記念文庫、お茶の水図書館成篋堂文庫、天理大学附属天理図書館、杏雨書屋等に同版本を擁するが、当館蔵本は比較的早印に属する。そして該本には、室町期以来の数手の書入があり、仮名抄を含む多くの補注を施した者は、文筆僧の天隱龍沢と知られる。⁽²⁷⁾その根拠は、第三至四十二冊（卷一至四十）間ほぼ毎冊の尾題の前後に加えられた、日付等の識語にあるが、これらの識語と補注は少なくとも三次に涉って記されたらしく、その様相は複雑である。まず第四十二冊（卷四十）の識語を見ると、「十二月十六日夜半。明日立春。始于長祿四年庚辰七月之季、終于十二月十六日、添潤九月、則凡七ヶ月也。自廿三卷至三十四卷、在播書之。三十九歳」とあって、第一次には長祿四年（一四六〇）の七月末から十二月十六日の間に加えられた。なお長祿四年に閏九月を存し、十二月十七日に立春を迎えたことは、暦や諸史料に明らかである。⁽²⁸⁾七月末の日付は確認できないが、第三冊「八月四日」以下、識語前方に見える墨

書がこれに対応する。これを除くと、第二次には寛正四年（一四六三）某日から文正元年（一四六六）六月二十五日の間に識語が附されている。第九至三十三冊（卷七至三十一）間の後方に、朱を交えて加えられたものがこれに当たる。そして最後は、第三十九冊（卷三十七）に「明應九年二月又書抄」と、第二次より三十四年を経た明應九年（一五〇〇）に記した識語がある。

こうして見ると、附識者は長祿四年に三十九歳、その閏九月末から十一月末の間は播磨に在り、同二十七日に上京して東山建仁寺に居り、明應九年二月に八十二歳で在世したことになり、その人物は天隱龍沢を置いて他にはない。天隱は応永二十九年（一四二二）播磨の出生で、臨濟宗一山派の僧として建仁寺大昌院等に居住した。默雲と号し、種々の抄物や『錦繡段』の編者としても著名な文筆僧である。応仁の乱を近江永源寺に避け、一時は京に戻ったが、赤松政則の外護を受け、播磨と京都の間を往来し、明應九年九月に歿した。註(27)太田氏の研究に拠れば、該本の補注と、建仁寺両足院収蔵の『柳文抄』に見える「黙」説が一致すると言う。該本はその注説を止める自筆書入本としても、極めて貴重である。『研究』未録。

精選唐宋千家聯珠詩格二十卷 卷十三至二十配同版本 半 五冊
元于濟編 蔡正孫(増)編〔並批注〕

〔南北朝〕刊

新補栗皮表紙(二三・八×一五・六糎)左肩題簽剥落痕あり。右下方打付に冊数墨書。首冊下小口に安田文庫「(書機)古板23」整理票を附す。虫損修補、天地截断。蔡正孫序(第一至六張)、首に「(上略)故凡詩家之字一意可以入格者靡不具載擇其尤者凡三百類千有餘篇附以評釋増為二十卷壽諸梓與鯉庭學詩者共之(中略)庚子春三月蒙齋野逸叟蔡(正孫)粹然書于方寸地(書行)」、「(上略)一/日留方寸地適有携江

／左 嘿齋于君之緘成／以詩格三卷（中略）於是旁／披博採增為二十卷（中略）命其子／彌高鳩工而壽諸梓欲／以公天下之斯文也刻／成翁不自以為功乃大書 于君姓名冠之篇／端而自附於其後（中略）大德己亥花朝玉淵王（淵濟）道／可敬書于龍湖書堂（書行）、「（上略）暇／日拈出絕句中字眼／合格者類聚而羣分／之綱舉目張有條不紊書成以所集三卷／質之蒙齋翁 翁是／之乃復益其所未備／者而備焉且命其子／彌高傳諸梓錫之以／連珠之嘉名（中略）德西／孟商番易默齊于濟／德夫序（書楷）の三序を附し、次で「精刊唐宋千家聯珠詩格總目」あり。

卷首題「精選唐宋千家聯珠詩格卷之一」（格低）「番易默齋于 濟 德夫／建安蒙齋蔡（正孫）粹然 編集（大字）／ 四句全對格（墨刻）／ ○漫興（格四）杜工部」、次で半行に批注（字小）、行を接し起承句、次で又半行に批注（同）、行を接し転結句。傍点、傍圈附刻。毎二句改行、毎章に四篇（毎卷首編のみ三篇）を存し改張。卷四至十六、十八至二十首題「精刊唐宋千家聯珠詩格」。卷四第六至十七張、卷十四第八至十一張鈔補。左右双辺（一六・九×一一・八糎）有界、毎張前半七行細四行、後半六行細四行、行十五字格、楷行写刻体。版心中黒口、双線黒魚尾（向）問題「幾卷（寺朱幾フ）」張数。卷十三第十七張（尾）中縫部「自八至此卷惡海書」記あり。三張掛け。卷尾題「精選唐宋千家連珠詩格卷之二」「精刊唐宋千家連珠詩選卷之二」「精編唐宋千家聯珠詩選卷之四」「精選唐宋千家詩海聯珠卷之十六」「精刊古今名賢連珠詩選卷之十八」等。

第四至五冊（卷十三至二十卷）に同版やや後印本を配す。「室町」朱豎点、校改、細字注句点、序のみ返点、連合符、音訓送仮名、同墨返点、連合符、音訓送仮名、稀に欄上補注書入、「室町末近世初」朱墨にて欄外校補注（用「杜詩千家注」「詩人玉屑」「本集（東坡詩）注」「毛句」「方輿勝覽」「氏族韻」「事林廣記」）書入。配本、別朱豎返句点、連合符、音訓送仮名、校改書入、又別墨返点、連合符、送仮名、欄上補注書入あり。首に双辺槽円形陽刻「孝經樓（書楷）」朱印記（山本北山所用）、單辺方形

陽刻「益城松氏」朱印記、目首並に第二至三冊首に同「曾在松／崎復家」朱印記（以上二顆、松崎慊堂所用）、卷九首に方形陰刻不明朱印記、第三冊尾、卷十六第二張後半、卷二十第十三張後半に單辺円形陽刻「竹／渡邊」朱印記、大尾に單辺方形陽刻「熙千光（書楷）」墨印記を存す（図18）。

本書はもと、江西鄱陽出身の于済が、唐宋の絶句の秀作を選んで分類した『詩格』三卷を源とするが、その稿本を建安の蔡正孫に献呈した所、蔡氏は、詩に頻用する字句を鍵として作品を整理した趣向を評価し、自ら多くの作品を増補、再編と評釈を加えて二十卷に発展させ、これを「聯珠詩格」と名付けたのである。大徳四年（一三〇〇）庚子の蔡正孫の序と、同三年の王道可の序に拠ると、正孫は子の弥高に命じてすぐに本書を版刻したというが、現在、当初の元版は伝存していない。ただ日本の文化元年（一八〇四）、大窪詩仏に依る本書の校刊本が出された時、盟友の山本北山が寄せた序文に、詩仏は「愛日樓所藏元刻本」を用いて校勘を行ったとあり、当時、佐藤一斎の許にはそれがあったのかも知れず、実際に元版の伝写本と思しき室町期の写本を見ることがある。しかしながら現在の所、失われた元版の全貌を知るよすがとなるのは、その翻刻と思しき、この五山版に如くはないようである。

わが国では南北朝以降に本書が流行したため、江戸初以降に多数の版本があつて流布本を形成するが、近世の版本は、みな直接には五山版に拠つておらず、これらは朝鮮朝の徐居正が注を加えた増注本に基づいている。具体的には、成宗二十三年（一四九二）に甲寅字で刊行された、朝鮮銅活字本を起源とするのである。しかしこの増注本は、活字の字体に制約された上、増注時に本文の校訂を加えたもので、却つて元版の相貌を損なつたと見られる点もあり、殊に蔡正孫評釈部分は、注釈の冗長を嫌つて割愛されてしまつた所が多い。また朝鮮朝にも徐居正増注以前の本文が、同じ甲寅字に依つてわずかに印出されているから、この本も十分参考に値するが、活字本の制約を蒙っている上、伝本が不完全であ

るから、基幹とすべきはやはり本版ということになるであろう。

同版本に国立公文書館内閣文庫蔵二本、宮内庁書陵部蔵本、東洋文庫蔵二本、お茶の水図書館成實堂文庫蔵本等がある。掲出の当館蔵本、惜しむらくは第四至五冊（巻十三至二十巻）に別伝本の補配があるが、この部分も同版であり、完帙と言っても過言ではない。問と他本に認められる後修の部分も、該本では原刻を保っているから、早印の国立公文書館内閣文庫蔵本や、お茶の水図書館成實堂文庫蔵本と比較しても遜色ないであろう。

またその伝来は、純粹とは言えないものの、極めて精彩があり、室町末の朱墨で施された『詩人玉屑』『増修互註礼部韻略（毛韻）』『方輿勝覽』『氏族大全（排韻）』『事林広記』等の諸書との互注の様子は、版本の普及によって爛熟した禅林の学藝の様を彷彿とさせるし、江戸後期に及び、大窪詩仏と共に宋詩の清新を鼓吹した山本北山が自ら鈴印した本であった、前述の文化刊本の序に自ら「平安翻刻元版本」と言うのが、本版を指すことは確実である。そして最後に、肥後益城の出身で掛川藩儒となり、江戸後期に勃興した考証学の成果を経学に応用し、精度の高い校勘を行った、碩学松崎慊堂の手を経ていることも、特筆すべきであろう。

〔国書〕

御成敗式目

大 一冊

〔齋藤長定〕（浄圓）等撰 清家點

享禄二年（一五二九）跋刊

後補栗皮表紙（二七・四×二二・一糎）。五針眼。本文厚手楮紙。

巻首題「御成敗式目（貞永元年八月十日）／一可^{ヘキ}下^下修^修理^理神^神社^社」^{ニス}専^専中^中祭^祭祀^祀上^上事^事」、毎条改行、題目欄上に条数を標し、本文に返点、連合符、音訓送仮名を附す。

左右双辺（二〇・八×一八・一糎）有界、毎半張七行、行十四字、写刻体。版心、中黒口、双線黒魚尾（^向不對）、上尾下題「式目」、下尾下張数。

本文末より一行を隔し「起請／御評定問理非決斷事／（中略）仍起／請如件／貞永元年七月十日／（^{以下}六格）沙（^隔四）彌淨圓／（略十一名）／相模守平朝臣時房」とあり。また一行を隔し二格を低して「此書廻万代不易之法也故加清家／點以重録諸梓矣蓋為俾夫愚蒙輩／易讀也苟易讀則通理速通理速／則犯法者稍少豈非師道少補乎／抑郷有先生村有夫子而時習之／学日新予寧為之哉博雅君子／庶幾諒察焉／享禄己丑秋八月 日／從四位下行左大史兼算博士小槻宿祢伊治」跋語並に印記摸刻。

前見返しに「橋爪組相川村／（^格低四）平左衛門」墨識、重ねて蔓草文様書込あり。首に単辺方形陽刻「青谿／書屋」朱印記（大島雅太郎所用）を存す（図19）。

本書は、鎌倉幕府が御家人間の争議裁定のために設けた法制で、北条泰時の指導下、北条時房等の評定衆参与の形で、斎藤長定等によって撰文され、貞永元年（一二三二）に完成、実施された。各国守護を通じて武家社会に深く浸透し、鎌倉幕府滅亡後も引続き武家法として行われたことから、中世後期以降にも転写本が多い上、解義を研究した注釈書も行われた。室町期には、公家や寺社の権益の処遇に関しても、本書規程が参考とされたため、その需要はさらに広がった。

中世後期、いわゆる博士家の中でも漢文解釈の宗匠と目された清原家は、早くに教隆の一流が東下して、北条氏や武家との関係を生じていたことから、本書成立の当初よりその解義を定め、累代の家説を形成したようであり、公家社会でも、実益に応じて本書への関心が高まると、その説が重視されるようになった。大永四年（一五二四）に至り、官務小槻家大宮流の末裔に当たる伊治が、本書を版刻して世に流布すると、この版本は無訓であったが、清家点等、既成の解義を止める受け皿となった。そして伊治が、五年を経た享禄二年、本書に清家点と称する訓点を

附し、愚蒙の輩にも読み易く、理に通ずること速からしむるために重刻発行したものが、本版である。

この版本は、中世には珍しい附訓の版本である。附訓版の嚆矢は、早く南北朝末期の嘉慶元年（一三八七）頃、義堂周信が跋を附し、約斎居士道儉が募縁刊行した、天台僧心空附訓の『妙法蓮華経』が知られ、応永二年（一三九五）には尾道浄土寺に於いて、その覆刻も行われた。これらの版本ではすでに字間行間の句圈、連読符、返り点、片仮名による和訓と送り仮名を附刻しているが、この享禄の『御成敗式目』も、国書附訓本の嚆矢として注意すべきである。

本版及び先行の大永版は、前述の正平本『論語集解』と同じく、宋元版の様式を採用した五山版とは一線を画するが、五山版盛行の餘波が外典に及んだものであり、純然たる外典の国書開版の事例として、最も早期に属する。両者が、共に清家の学説を用いていることは、当時の学術情況の反映であり偶然ではないであろう。なお伊治は、山口に下って大内氏の擁護を受け、天文二十年（一五五二）大内義隆の滅亡に際して、自らも命脈を絶っていることから、本書の大永、享禄版を、大内氏の援助による開版と見る観測がある。⁽³⁰⁾

同版本に宮内庁書陵部蔵二本、早稲田大学図書館蔵本、東京大学総合図書館蔵本等がある。該本は近代まで会津橋爪組相川村、現在の福島県大沼郡会津美里町相川に伝来したようであるが、その経緯は不明。転々して一時は蔵書家大島雅太郎の有に帰した。

聚分韻略（題目）三卷（首題）

釋虎關師鍊撰

枳形小 一册

天文八年（一五三九）跋刊 三重韻本

新補小葵文空押艶出丹表紙（一六・二×一四・五糎）左肩打付に「天文版聚分韻略」と書す。右肩に单边円形陽刻「辞書（書楷）」朱印記あり。一部

裏打修補。前副半葉（旧前見返し背面）左肩に別筆にて「聚分韻略」と書す。首に「聚分韻略序」（中略）嘉元丙午仲春上澣／河東虎関師鍊序」（室町末近世初）鈔補）、「聚分韻略／卷之一（上平）・卷之三（上声）・卷之四（去声）／綱目」（同）あり、入声は欠き門目を附す。

卷首より「東第一（上平）・董第一（上声）・送第一（去声）／乾一（重形陽開陰刻）東（春方）」以下本文。各段の声部毎に毎韻改行。仄声了らば、次行より平声を一段に掲す。或いは「聚分韻略卷之二／先仙第一（下平）・銑獮第十六（上／声）・霰線第十九（去／声）」、「聚分韻略卷之五（隔五）入聲／屋第一」と題す。

单边（一二・六×一一・八糎）縦横有界、每半張九行、行六、四、四字格。版心、小黒口、三線黒魚尾、下二尾（同対）間に張数。尾題「聚分韻略上平終」、或いは「聚分韻略下平終 上聲終 去聲終」、「聚分韻略入聲終」と題す。入声尾題後未刻部に陰刻で「玉田千駒（押花）」記あり。尾に「三韻一覽寶於世之／書也（中略）故不待其桐梓／之朽腐乃復命工新／其刊矣庶為是州廳／本乎然而小其字於／舊板冊子亦短其紙／蓋所以備於勤于熟／覽者之藏於巾箱携／於袖間也若夫與舊／本同施敷於世光飾／藝苑潤色詞林則所／謂徑寸之珠不失寶／於其形之小者也矣／皆天文八年己亥春／三月日（正四位行太宰大貳兼兵部權大輔周防介臣多多良朝臣義隆）」刊跋を附す。

〔室町末〕朱筆にて標鈎、標字左肩唐宋音仮名、墨筆にて標字右傍音仮名、左傍訓仮名、欄外朱墨片仮名交り音注、両音、文字増補（宋僧法諱下字等）書入、後見返し後筆にて享禄庚寅日陽真幸院刊跋細書。首に单边方形陽刻「黒川真頼藏書（書隸）」、同円形「黒川／真頼（書楷）」朱印記、同方形「黒川真道藏書（書楷）」朱印記、前副葉に同「黒川真前藏書（書隸）」朱印記、同「小汀氏藏書（書楷）」、尾に双边同「小汀文庫（書楷）」朱印記を存す。新補箱蓋表面に「天文版聚分韻略 壹冊／一名大内本ト稱ス」、裏面「此の天文版聚分韻略は本書の跋文／にも見えたるか如く大内義隆朝臣のもの

／せられたるものにして吾に山口本ともまた大内／本ともいふものなり
藤貞幹の好古日録本の巻に／云老人雜話曰大内介ハ西國一ノ大名ナリシ
周防ノ山口／城ニ居ル紙ヲ大明ヘ遣シ書物ヲ摺セテ取寄ケ／リ今ニ至テ
有リ山口本トモ大内本トモ云」因テ云大／内家藏板ノ聚分韻略アリ義隆
家刻ノ跋アリ其本今稀ニ存ス（以上／文）と見えたるはすなは／ちこ
の本なり（明治三十年十月（格））黒川真道識」識語あり（図20）。

わが国では宋版本の将来とともに韻書『広韻』の使用が広がったが、
本書はその節略本で、二百六の韻部を、同用の許される百三十韻に抑え、
収録の字数も制限する一方、韻部の下に邦人に便宜のある「乾坤」以下
十二の意義分類を加えた辞書である。嘉元四年（一三〇六）丙午に虎関
師鍊が編集し、一山一寧の跋を得て流布された。少なくとも南北朝には
版本があり、中世後期を通じて最も多く出版された書物である。

本書は当初、虎関編集の原形を保って行われたが、室町期になると、
本文は変えずに、体式上の大きな変更が行われた。元来本書は、漢語音
韻の四声に従い、上下平声、上声、去声、入声の五卷に編成されたが、
これに変わって三卷に再編した本文が通行したのである。四声の中でも、
韻尾の音形によって纏めた入声と異なり、平、上、去声は高低等の声調
に従う区分であって、実は各声内に同じ音形に基づく韻部が同じ順序に
排列されている。この三声相對の組織を利用し、平、上、去声の対応す
る音形の韻部を三層に並べて標示する体式が考案され、版本にも採用さ
れた。そしてこれらは、上平声とそれに対応する上声去声、下平声とそ
れに対応する上声去声、さらに入声の三卷編成とされたのである。この
体式を有つ『聚分韻略』を「三重韻」と呼ぶが、この実用を重んじた「三
重韻」は、文明十三年（一四八二）の薩摩版を始め、地方版として重刻
され、明応二年（一四九三）周陽（周防）真葉軒刊本、享祿三年（一五三〇）
庚寅の日陽（日向）真幸院刊本や、当該の版本もその一種に当たる。こ
れらの諸版で、実際には三卷構成であるのに入声が巻五と標示されるの

は、原形の名残りである。

本版に附された天文八年の大内義隆の刊跋に「然而小其字於舊板、冊
子亦短其紙、蓋所以備於勤于熟覽者之藏於巾箱、攜於袖間也」とある部
分の後半は、「蓋し熟覽に勤しむ者の、巾箱に藏し、袖間に攜ふるに備
ふる所以なり」、明応版の腐蝕が進む以前に本書を再版するのは、旧版
よりも小字を用いて判型を短くし、収納、携帯に便宜あらしめるため、
と述べたのであろう。巾箱本の「三重韻」はこの大内版が嚆矢であり、
後世よりも開版の難しかった室町期に、踵を接して再版を試みている点
に、本書常用の韻事の流行と、山口府中に於ける出版の興隆を見るこ
とができる。山口では大内盛見が応永十七年（一四一〇）に『藏乘法数』
を刊行して以来、明応年間（一四九二―一五〇一）に「三重韻」や「正
平本論語」を覆刊し、『御成敗式目』をも刊行した可能性があることは
前述の通りであって、本版の刊行はその掉尾を飾る。

同版の伝本は非常に少なく、他に東洋文庫蔵二本が知られるのみであ
り、当館にさらに一本を擁することは貴重である。その書人を見ると、
室町期禅僧の本書使用の実態が知られ、本文に加え、朱墨の筆とその位
置を変え、和訓、和音、禅宗常用の唐宋音とを書入れて、日本語社会に
於ける漢字の使用に一層便宜ある形とし、日本漢学を進展させた一過程
を垣間見せている。近世の伝来は明らかでないが、近代には国学考証学
派の流れを汲む、黒川家三代の手沢を経て、明治三十年（一八九七）真
道による『好古日録』引証に基づく附識があった。『研究』未録。

〔総説〕

本稿は、国立歴史民俗博物館の蔵する五山版全点に対し、書誌学的な
調査研究を加え作成した、目録と解題である。

五山版として取り上げる範囲は、この分野の基盤的な研究業績である

川瀬一馬氏『五山版の研究』（一九七〇、日本古書籍商協会）に著録の版種とした。本文中にも述べたが、川瀬氏『研究』の採録はその範囲が広く、五山禅林の出版物は言うに及ばず、その類版、禅僧関与の出版や、その影響下に派生した出版の全般に涉り、その中には、版本研究の立場からすると同列には論ぜられないであろう書目も含まれている。

稿者の意図する五山版の定義は、日本中世の「本文形態共に宋版に仿った出版」（大沼晴暉氏『図書大概』（二〇一二、汲古書院）一〇五頁）である。無論、元明版への依拠もその範疇に含まれるし、本文系統が直接宋本に基づくことなくともよく、その編集、校刊、彫版、装訂の各過程で、宋版本以来の唐山の様式に依拠、またはこれを応用している場合に、五山版と称することが適切と考えている。要するに、南北朝前後の、禅僧による大陸との文化交渉の結果として日本に成立した出版様式を、一括してそう呼びたいのである。

従って、中世禅林の出版と雖も、古版経の再刊に手を染めた場合や、禅宗の帰依者が博士家証本に基づいて版刻を行う場合、その版本を五山版と呼ぶことは、適切ではない。しかし上記は、あくまで私見であり、川瀬氏が、日本中世の出版文化の主要を示すために定めた枠組みは十分に有意義であって、一般の認識はむしろそちらに近いであろう。そこでこの度は、公益に鑑み、その枠組みに従うこととした。

具体的に、上記の『論語集解』と『御成敗式目』は、五山版と呼ぶに相応しくないが、本稿に収録した。また当館には別に、水木家資料中等に『大般若経』『華嚴経』の古版残帖があり、五山版と整理されているが、様式として五山版と認めがたい上、川瀬氏『研究』にも採らないため、本稿に収録しなかった。

さて、本稿はこれら五山版全点の解題研究を根幹とするが、その結論を標記した目録を前掲し、索引の便宜を図った。目録標記は、各本解題の前方にも再掲したが、その際には煩雑を避け、旧蔵者の記述を再掲し

なかった。

目録解題の構成は、五山版全般の書目構成に鑑み、まず全体を内典と外典に大別し、さらに内典は一般の仏書と禅籍、外典は漢籍と国書に分け、各部の排列は成立の順とした。なお内典末尾の二種は日本僧の著作であり、国書に相当する。

目録解題の記述について、使用の文字は、なるべく原本の字体に従ったが、実際には UNICODE (UTF8) 登録の範囲に限定した。また、何等かの理由で原本に見えない文字を推定補記する場合には、「」符を用いてこれを区別した。また稿者の注記を（）内に記した。その他、小字を（）内に、改行を／符で表記した。同行中等位の改行は――内に／符を加えた。

解題の記述は、原本に基づく書誌を前掲し、書誌学的に重視される情報は、煩雑とはなるが、これらを全て採録した。記録の後、本文の成立過程、版本の系統、版種の特徴、当該伝本の伝来に関する事柄を解説した。一点ごとの十分な理解を図るために、冗長となった箇所もある。

さて、本稿著録の総数は二十一種、このうち一般の仏典は四種、禅籍十一種、漢籍四種、国書四種（二種は禅籍と重複）である。この内訳は、五山版全般の内訳をある程度反映する。禅籍がその中心であることは言う俟たないが、漢籍外典の収蔵は、知られている版種に比べ、割合に少ない。これは、来朝刻工の出版書等、五山版の外典に伝本の少ないものが多いことと関係し、戦後の市場にはそれを求め難かった事情が作用しているよう。ただ、五山版の実情は却って穏当に映しているとも言える。

禅籍の中でも、正法寺版の『碧巖録』、覆建仁寺版の『五灯会元』、天龍寺版の『仏鑑禅師語録』、臨川寺版の『禅林類聚』等、代表的な版種が揃っていることは貴重である。これらは宋元版禅籍の複製として、典型的な五山版の様式を備えた好例であり、そのうちの幾つかは、目を瞠るべき早印本であって、『禅林類聚』に至っては、室町期収蔵の原姿を現在に

止め、それだけでも参考の価値がある。

また『禪林類聚』の他、『翻訳名義集』『月江和尚語録』『唐柳先生文集』等、来朝刻工の版刻に重点が置かれていることも、当館収蔵の特色である。これは、書物を見る上で、本文の参考価値に止まらず、物品として実在する社会的基礎、文物の歴史的価値を問う中から醸し出された特色かと愚考する。本文中にも若干の考察を加えたが、これらの版本を観察すると、殆ど残存しない五山版の版本の様式を窺わせる等、版本の背後に潜む印刷技術史の一斑が、顔を覗かせている。そう考えれば、正平版『論語集解』や、各種大内版等の版本も、中世印刷史資料として重要である。

五山版の伝本は、出版史の資料としてのみでなく、版本に基づく学問史の資料としても意義があり、例えば旧蔵の識語や印記から見ても、建仁寺の天隠龍沢や、東福寺の彭叔守仙等、著述に富む五山僧の手沢書人本を含み、建仁寺両足院、鹿王院、東福寺法幢院、同芬陀利華院、同不二庵、同即宗院、慈濟院、長門洞春寺、周防龍豊寺、越後至徳寺等の禅院に於ける伝承と、学僧繙読の事蹟も知られ、京洛から地方への伝播も見える。さらに曼殊院、紀伊根来寺、尾張万徳寺等、禅院の外での五山版の受容という、図書流通史上の問題も指摘される。

また『聯珠詩格』の山本北山の鈴印は、近世日本漢学の資料として重大な意味を有ち、北野天満宮に関係した江戸中期の平敬道氏に依る「正平版論語」考証の事蹟も、今後に研究の深化が求められる。伊佐早謙や黒川真道といった近代国史学者の考証の跡も、学術史の一斑を成すであろう。

さて当館の五山版収蔵は、主として開設時の一九八三年以前と、八九年の第二展示室拡充の前後に為されている。直接の来源は開設以前の文化庁管理品と、有力書肆を通じた市場からの購入ということになる。そうした蒐集時期からすると、殆ど全て近現代の蔵書家の旧蔵品に当たすることは当然である。先に当館収蔵には瞠目すべき早印本が多いことを

述べたが、これは当代一流の蔵書家の眼を経ていることにも一因がある。

その中でも特に目立つのは幕末の小津桂窓と、近代の安田善次郎、小汀利得の三者であろう。小津氏西荘文庫本は『祖庭事苑』『禪林類聚』『大応国師語録』の三種で、これらは全て安田文庫を経由し、同文庫には他に『金剛般若経註解』『聯珠詩格』をも収蔵した。小汀文庫には石井積翠軒旧蔵の『臨濟録』『仏鑑禅師語録』の他、『首楞嚴経会解』『翻訳名義集』『五灯会元』『月江和尚語録』『夢窓国師年譜』『聚分韻略』と、計八種を収蔵した。安田、小汀の両文庫で、歴博収蔵の半数以上を保有していたのである。

最後に、本稿に於いても最大の拠り所とした川瀬氏『研究』は、五山版諸伝本の著録の数も最多であろうが、本稿では八種の伝本が『研究』に未録であるため、各項の末尾にその旨を注記した。当然ながら、安田文庫と積翠軒文庫旧蔵本は全て既録であるが、小汀文庫旧蔵本には未録本が散見される。⁽¹⁾ なお未録とは、個々の伝本の録否を称したもので、版種として未載のものは認められなかった。改めて同書の周到さに驚嘆する。ただ『月江和尚語録』の至徳四年刊本が、別種とされる〔南北朝〕刊本と同版であること、『韻鏡』の初刻を享祿版とすることには疑問があること等、若干の修訂が必要かと認められた。記して識者の指正に俟ちたい。

歴史民俗博物館収蔵の書物と言えば、国宝の宋版『史記』『漢書』『後漢書』等、国指定文化財の尤品が著名であるが、中世の歴史に興味を有ち、展示室に足を運ぶならば、印刷文化コーナーの充実に目を止めるに違いない。彫版途中の版本を再現した迫真の複製品や、的確妥当な解説もさることながら、展示される実際の版本の水準が極めて高く、稿者もかつて、室町期の書人詳細な『唐柳先生文集』の館良甫版を見て、涵養を得た者の一人であった。

その『唐柳先生文集』については、近年太田亨氏の研究が発表され、

新たな事実が明らかにされたが（解題参照）、他の版本にもそれぞれ、そうした成果を喚起する餘地がある。一展示項目を支えるために、これだけの文物が背後に準備されているのは実に驚くべきことであり、本稿がその紹介の役割を果たしているかどうか心許ないけれども、書物に龍められた人事の一斑を示し得ていれば幸いである。

註

- (1) 野口善敬氏『元代禪宗史研究』（禪文化研究所、二〇〇五）参照。
- (2) 阿部隆一氏『中国訪書志』（一九七六、汲古書院、一九八三増訂）参照。
- (3) 伊藤東慎氏『黄龍遺韻』（建仁寺両足院、一九五七）参照。
- (4) 北京本は『四部叢刊』に影印、台北本は註(2)阿部氏著書者録。阿部氏に拠ると、紹興の周序の署名『四部叢刊』収録の涵芬樓旧の北京本には周氏の諱「葵」字を欠き、台北本は「その字埋木の如く見える」由であるが、五山版も該当字空格であり、前者の形に従っている。
- (5) 愛甲昇寛氏「尾張万徳寺の文化財」（『金沢文庫研究』第二八七号、一九九二）、万徳寺の聖教については小倉慈司氏に指教を得た。
- (6) 拙稿「詩人玉屑」版本考」（『斯道文庫論集』第四十七輯、二〇一三）注24、企画展示「時代を作った技―中世の生産革命―」図録・コラム「六張一版の説―渡来刻工の彫った版本のかたち―」（国立歴史民俗博物館、二〇一三）に詳述した。
- (7) 中川徳之助氏『万里集九』（一九九七、吉川弘文館）参照。
- (8) もとの元版を確認できない。扉の牌記や序跋を見る限り、杭州張氏刊行の坊刻本であることは確実であろうが、大徳四年（一二三〇）、同九年校刊の序を備える一方で、張氏の校訂を記した延祐四年（一二三二）の跋をも有するから、大徳刊延祐修本であるのか、大徳の刊行が延祐までずれ込んだものか、判別が着かない。
- (9) 拙稿「不二和尚岐陽方秀の学績―儒道二教に於ける―」（『書陵部紀要』第四十七号、一九九四）に述べた。
- (10) 拙著『中世日本漢学の基礎研究 韻類編』（二〇一二、汲古書院 第一章）。
- (11) 川瀬一馬氏『五山版の研究』（一九七〇、日本古書籍商協会）には南禪寺版を先出とするが、本版についても「覆宋刊の端正な雕版」と解説している。
- (12) 註(11)川瀬氏著書。
- (13) 東岡はこれ以降にも、臨川寺で『集洪州黄龍山南禪師書尺』『了庵和尚語録』『諸偈類要』等の版刻を行った。玉村竹二氏『臨濟宗史』（一九九一、春秋社）第十

六話参照。

- (14) 同種の募縁事業と銭貨の単位換算について、小森正明氏『室町期東国社会と寺社造営』（二〇〇八、思文閣出版）を参考とした。
- (15) 『師守記』同日条。
- (16) 椎名宏雄氏『宋元版禪籍の研究』（一九九三、大東出版社）参照。
- (17) 玉村竹二氏『夢窓国師』（一九五八、平楽寺書店）参照。
- (18) 註(11)川瀬氏著書。
- (19) 初刻の正平版に版本は伝わらないが、印面に版心がない上、印面を分節する空白を持たないことが、印本からわかり、卷子用の様式にさらに近い。但しその伝本はみな冊子で、十二行の中央に張数を彫り加えているから、少なくとも現存本の印刷時には、冊子での印刷を想定したようである。
- (20) 往々これ等を含め「正平版」と称するが、元来は初刻本のみを指すべきで、今は川瀬一馬氏の呼称に従い、覆刻本を含む場合は「正平本」と言う。川瀬氏『日本書誌学之研究』（一九四三、大日本雄弁会講談社）収録の「正平本論語攷」参照。
- (21) 本文系統や様式の観点から、これらを五山版に含めない立場があり、原則として従うべきものと考えられるが、「正平版論語」は、中世の外典の版本として、五山版と一括して扱われることが多く、本稿でも便宜に従い五山版に含め取り上げた。大沼晴暉氏『図書大概』（二〇一二、汲古書院）参照。
- (22) 註(20)川瀬氏著書収録「享祿版韻鏡に就いて」参照。
- (23) 小川剛生氏「韻鏡の悪戯」（『日本と宋元』の邂逅 中世に押し寄せた新潮流 アジア遊学一二二、勉誠出版、二〇〇九）参照。
- (24) 岳珍氏「柳集五百家注俞良甫翻宋本考述」（『典籍与文化』第六十八期、二〇〇九）、太田亨氏「五山版『新刊五百家註音唐柳先生文集』について」（『文学 隔月刊』第十二巻第五号、二〇一一）参照。
- (25) 『中華再造善本』に拠った。
- (26) 『師守記』貞治六年（一二三六）七月二十一日条、『空華日用工夫略集』応安三年（一二七〇）九月条。
- (27) 本節以下の内容については、太田亨氏「両足院所蔵『柳文抄』について」（『京都大学国語国文学研究室編『柳文抄』〈両足院叢書〉、二〇一〇、臨川書店）に研究と指摘がある。
- (28) 湯浅吉美氏『日本暦日便覧』（一九八八、汲古書院）参照。
- (29) 拙稿「旧刊『聯珠詩格』版本考」（『斯道文庫論集』第四十三輯、二〇〇九）の本版の項には、該本を著録することができなかった。
- (30) 川瀬一馬氏「大永版御成敗式目の発見」（註(20)川瀬氏著書）。
- (31) 川瀬氏は「研究」の上梓以降も補訂を進められ、相当の件数に上る由（岡崎久司氏の御教示に拠る）、本稿収録分も多くはそれに含まれるであろうが、当面は

参考することを得なかった。

【附記】

解題研究のための原本調査につき、一貫して当館小倉慈司氏の幫助を忝くした。記して御礼申し上げる。また資料の熟覧について、再三に渉り森谷文子氏をお煩わせした。お詫びし、併せて深謝を申し上げる。

本研究の一部を、当館平成二十四年度共同研究「中世の技術と職人に関する総合的研究」集会に於いて報告し、参加の諸彦より貴重な意見を賜うことができた。御礼申し上げると共に、その機会を与えて頂いた村木二郎氏に感謝申し上げる。成果の一端は平成二十五年度の企画展示「時代を作った技―中世の生産革命―」印刷技術のコ―ナーに示し、同展図録にも解説した。併せて参照を請いたい。

本稿は平成二十五年度日本学術振興会科学研究費補助金・基盤研究（B）「中世を終わらせた「生産革命」―量産化技術の広がり―と影響―」（課題番号三三二三〇一四三、代表中島圭一）に基づく成果の一部である。

（慶應義塾大学附属研究所斯道文庫）

（二〇一三年五月二〇日受付、二〇一三年七月三〇日審査終了）



図1-2 同 金剛般若波羅蜜經 卷首

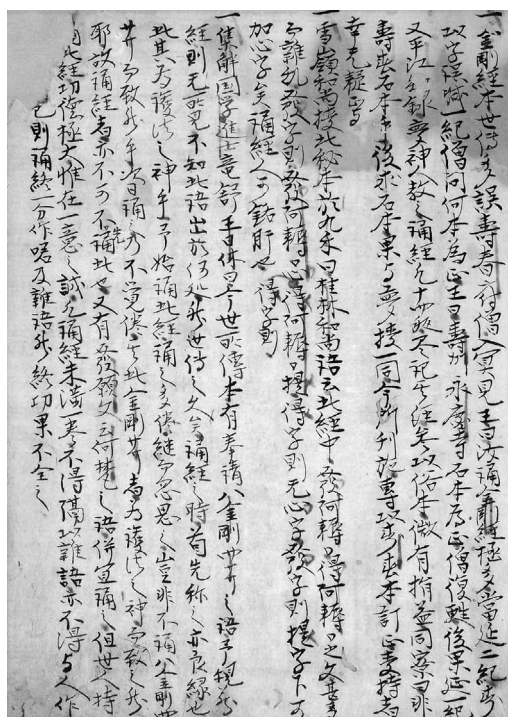


図1-1 金剛般若波羅蜜經註解等
応永27年刊本 前副葉

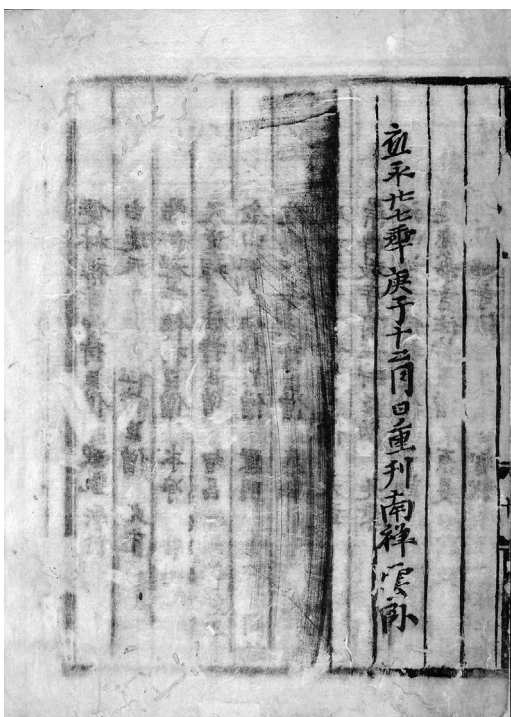


図1-4 同 刊記

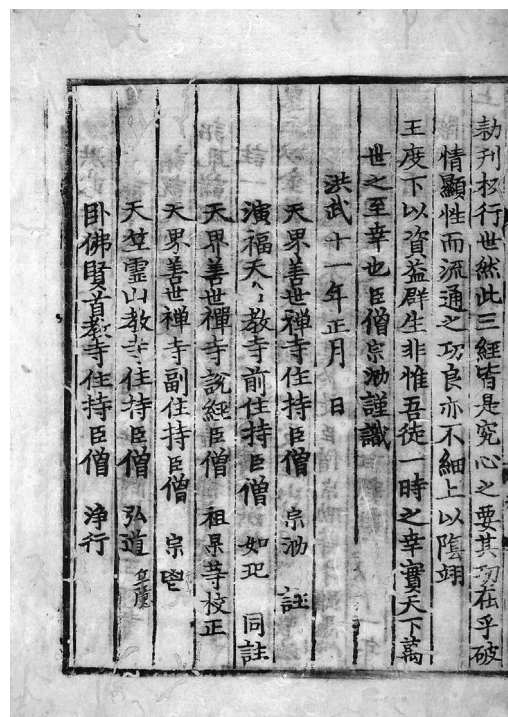


図1-3 同 表末

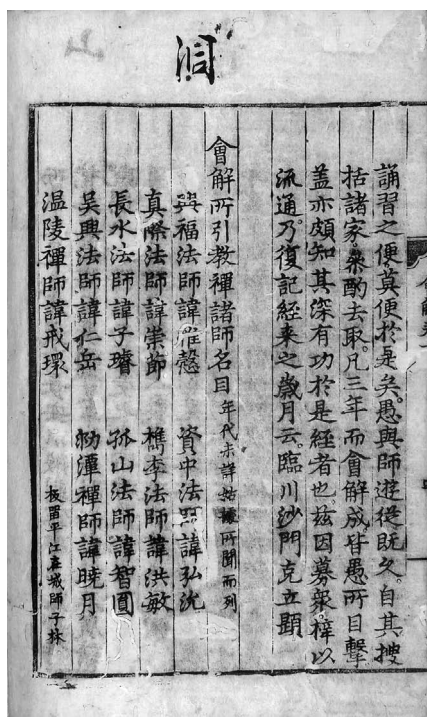


圖2-2 同 原刊記

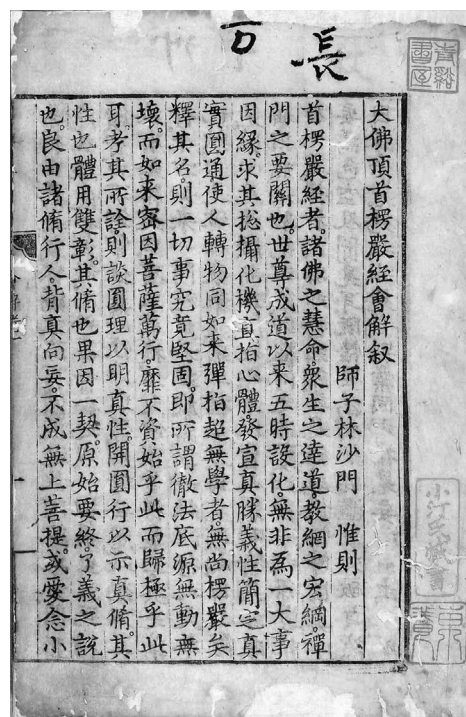


圖2-1 大佛頂如來密因修證了義諸菩薩萬行首楞嚴經會解 康應2年刊本 首

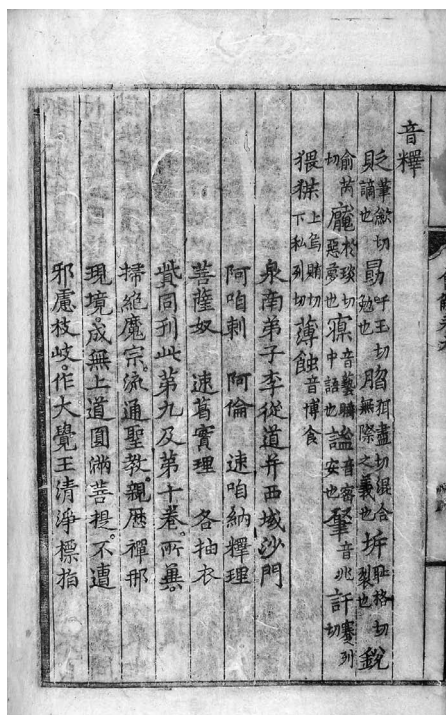


圖2-4 同 卷9尾 原施財刊記



圖2-3 同 卷首

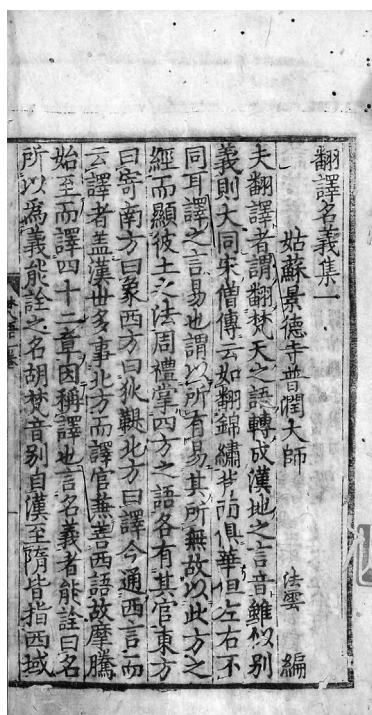


図3-2 同 巻首



図3-1 翻譯名義集
〔南北朝〕刊本 首

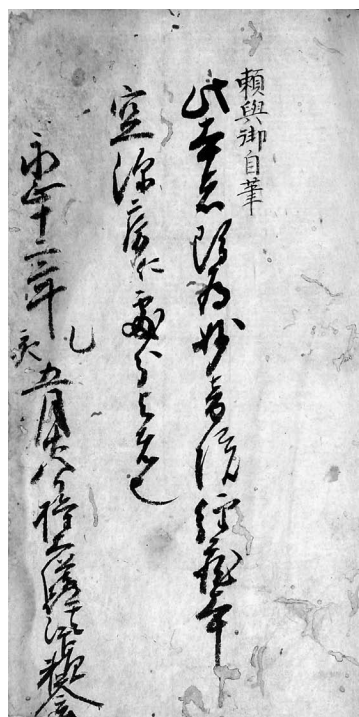


図3-4 同 大尾見返し

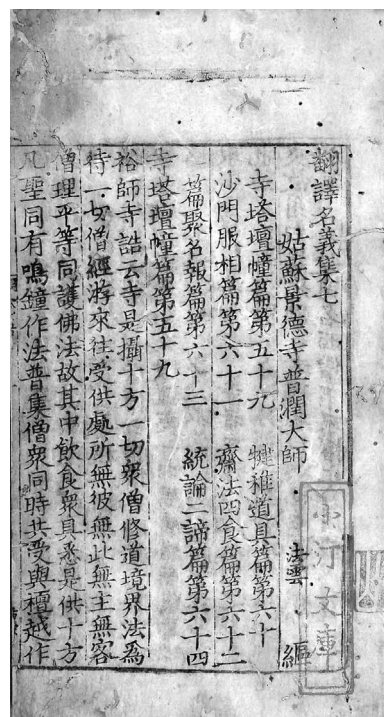


図3-3 同 巻7首

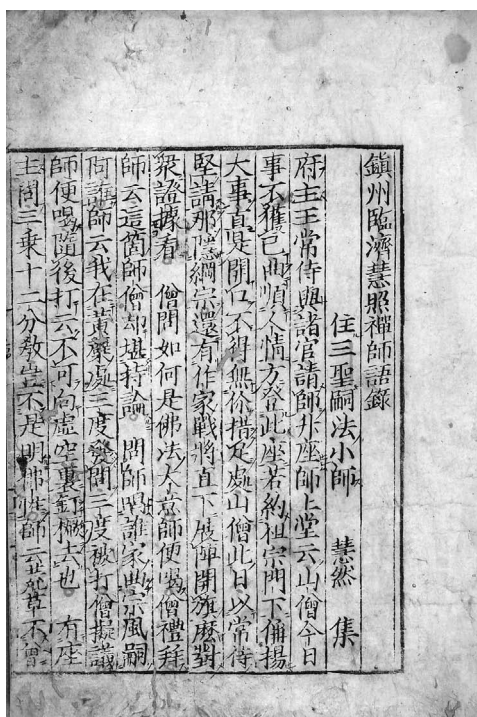


圖4-2 同 卷首

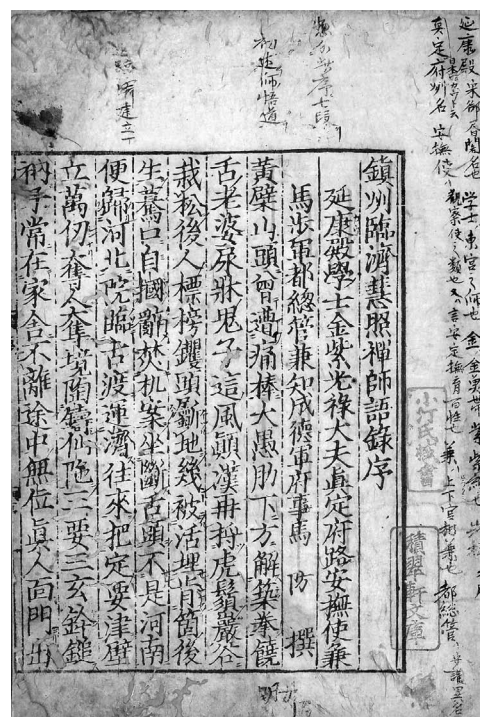


圖4-1 鎮州臨濟慧照禪師語錄
延德3年刊本 首

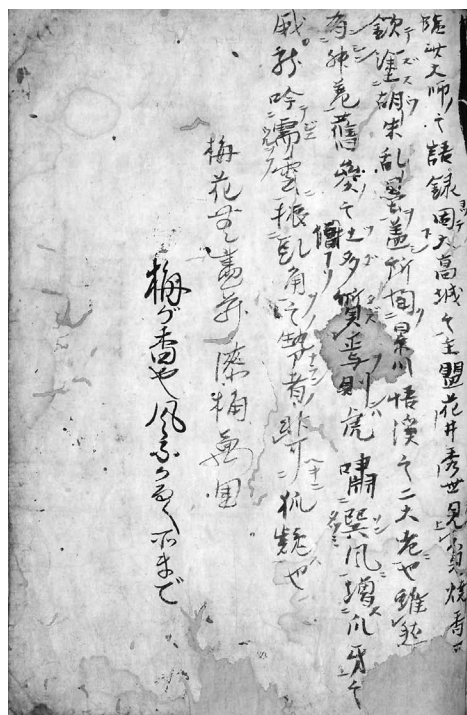


圖4-4 同 後副葉

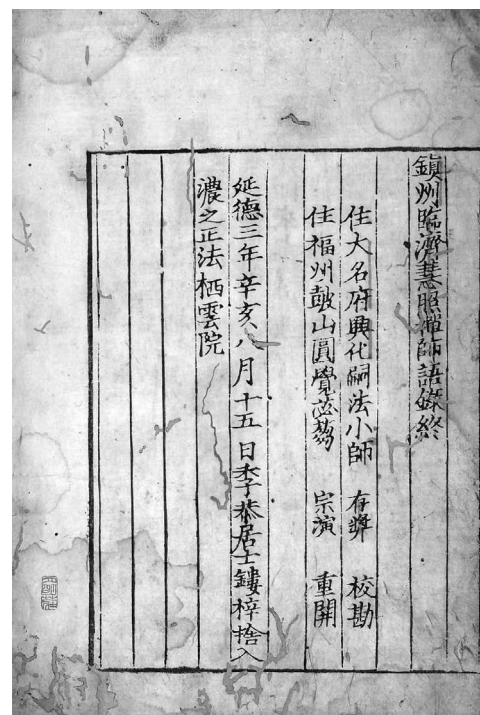


圖4-3 同 刊記

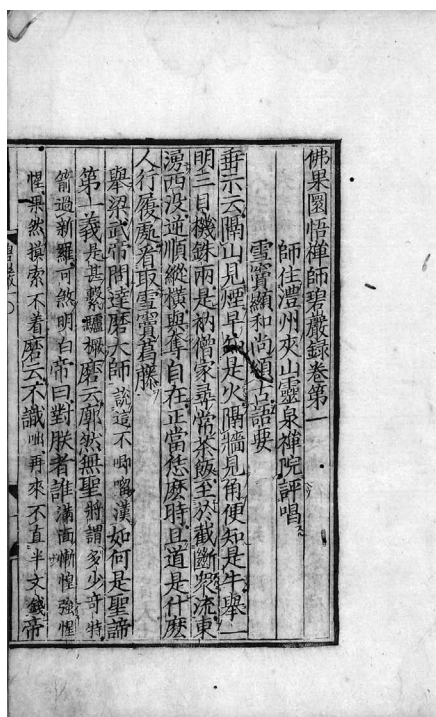


図5-2 同 巻首



図5-1 仏果園悟禪師碧巖錄
〔室町〕瑞龍寺刊本 封面

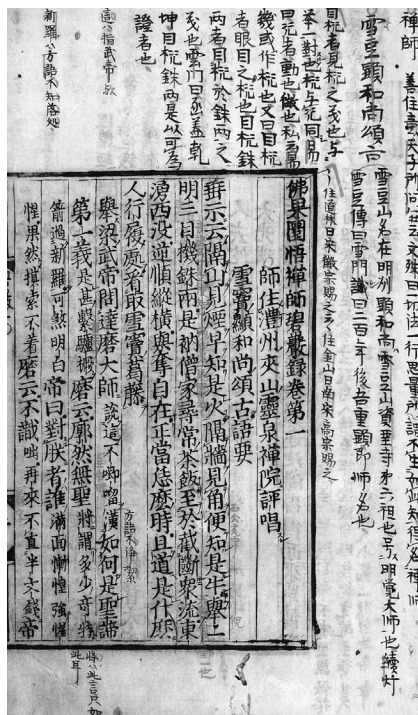


図6-2 同 巻首



図6-1 仏果園悟禪師碧巖錄
〔室町〕妙心寺刊本 封面



圖7-2 同 卷5第15張左辺外
同 第10張右辺残映

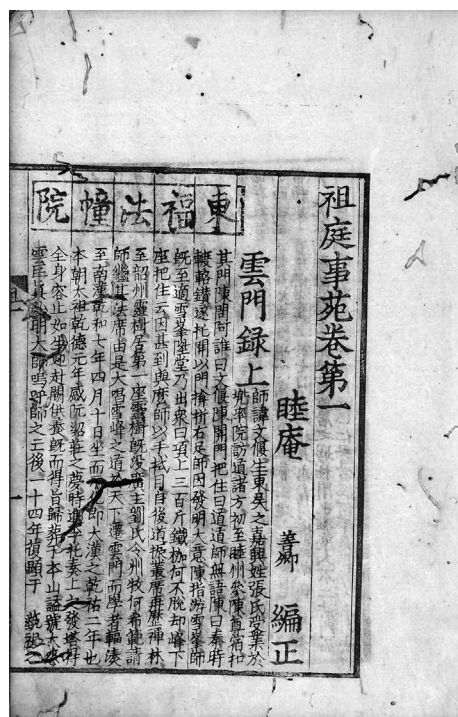


圖7-1 祖庭事苑〔南北朝〕刊本 卷首

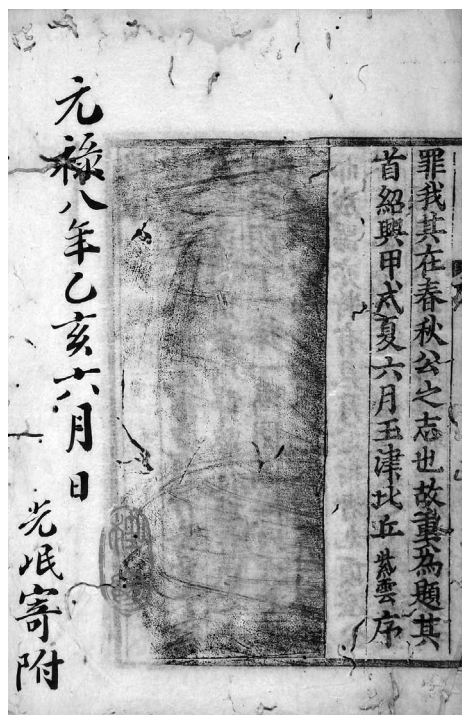


圖7-4 同 大尾識語



圖7-3 同 原刊記



図8-2 同 巻1尾 刻工戯刻並に施入識語

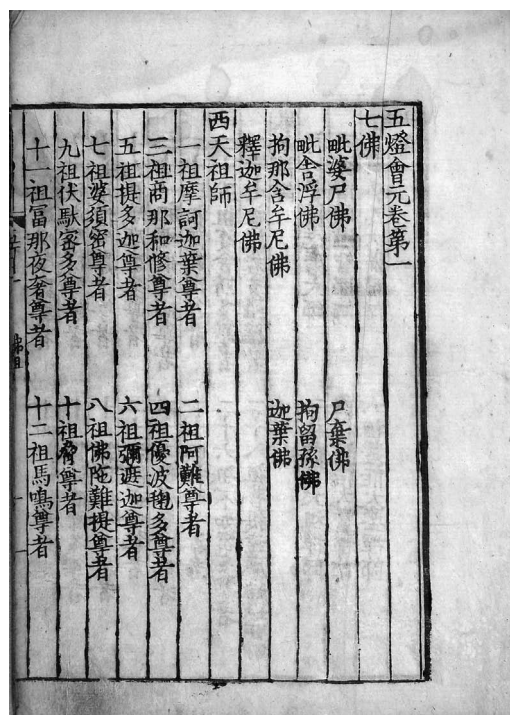


图8-1 五灯会元〔南北朝〕刊本 卷首



図8-3 同 原勸縁記並に原刊記

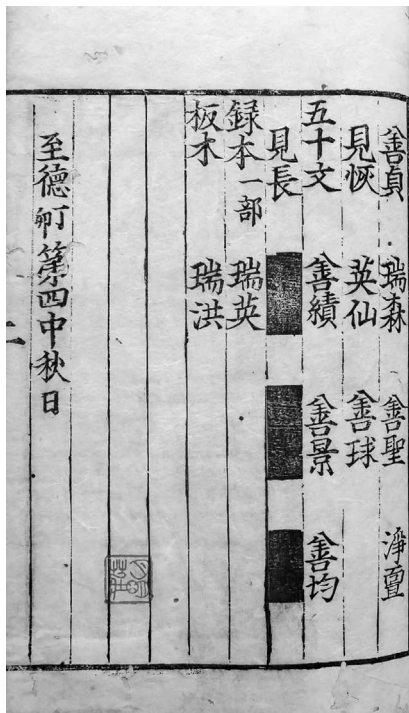


圖9-2 同 大尾刊記

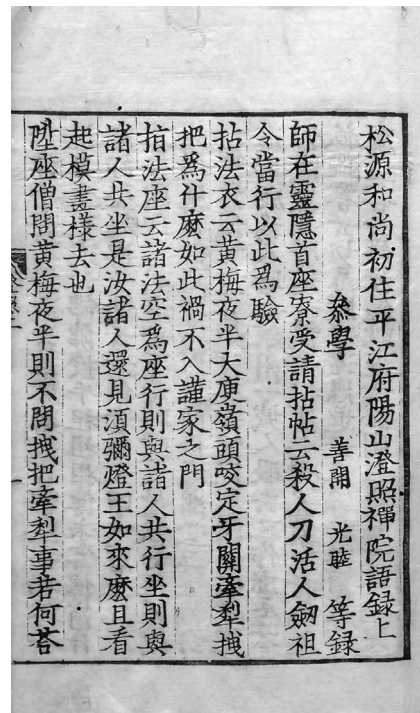


圖9-1 松源和尚語錄
至德4年刊本 卷首

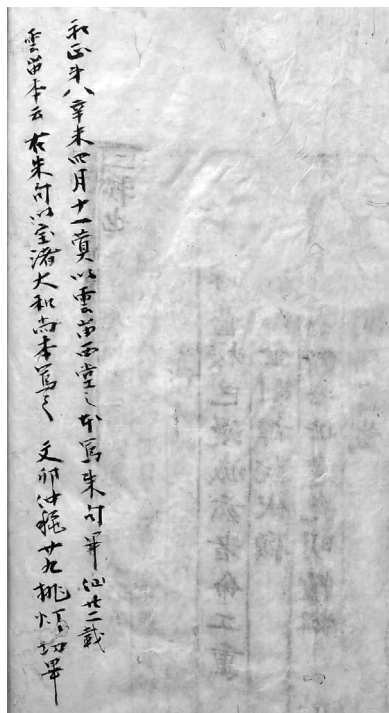


圖10-2 同 大尾識語

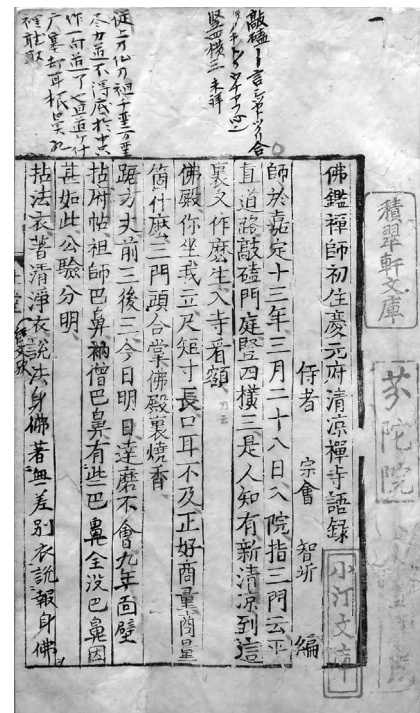


圖10-1 佛鑑禪師語錄
元安3年刊本 卷首



図11-2 同 卷首

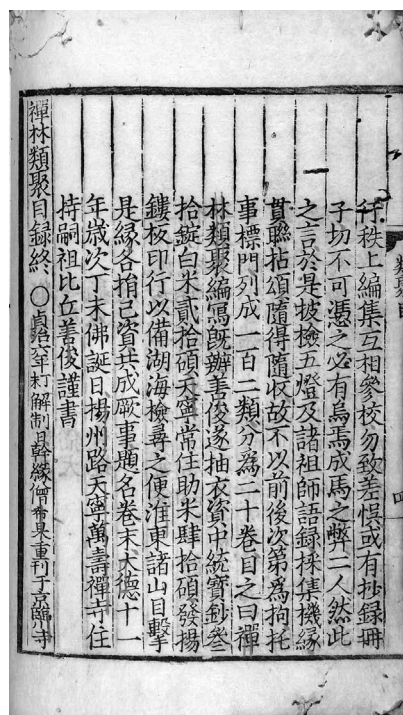


図11-1 禪林類聚
貞治6年刊本 目尾刊記



図11-4 同 大尾施財記



図11-3 同 卷5尾 原施財記

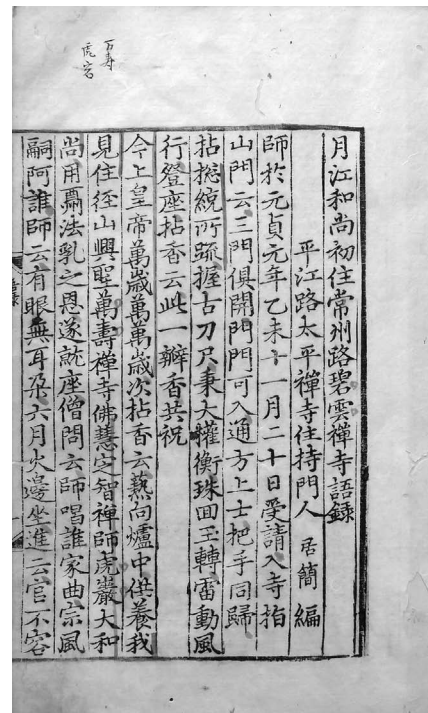


圖12-1 月江和尚語錄
〔應安3年〕刊本 卷首

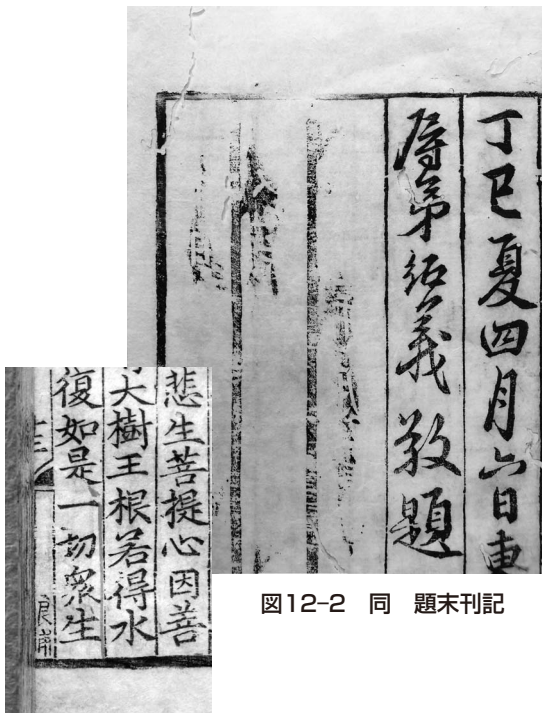


圖12-2 同 題末刊記

圖12-3 同
卷下第13張版心工名

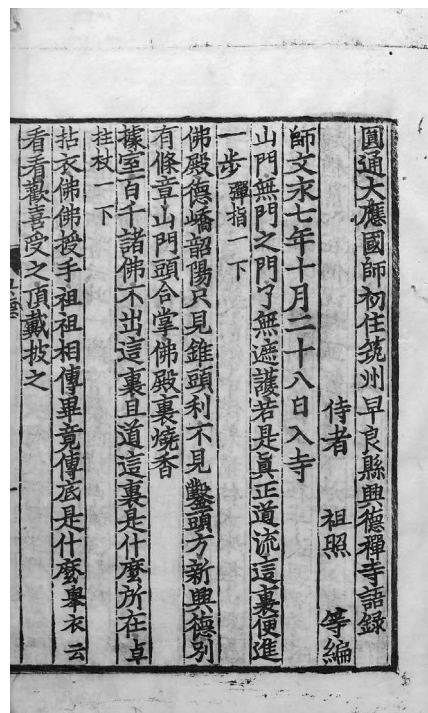


圖13-1 円通大應國師語錄
應安5年刊本 卷首

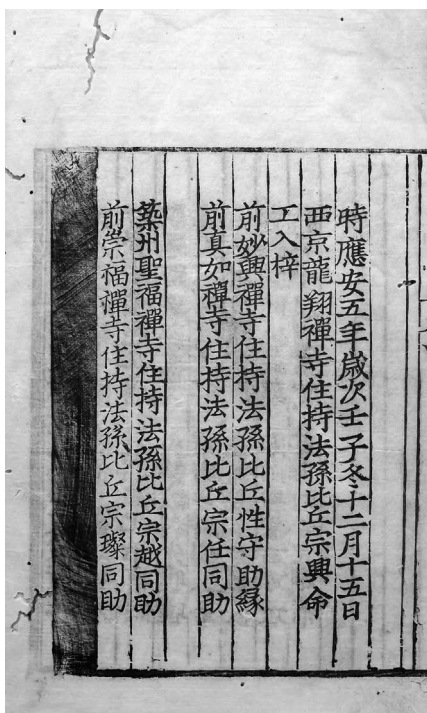


圖13-2 同 大尾刊記



図14-2 同 大尾

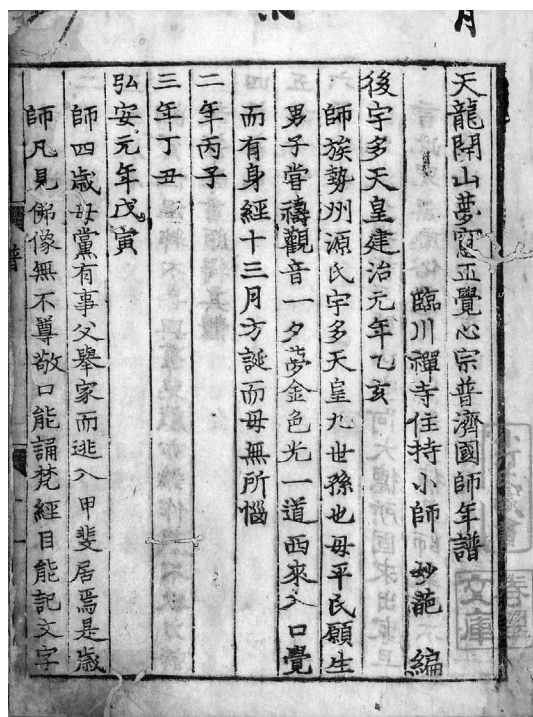


図14-1 天龍開山夢窓正覺心宗普濟國師年譜〔南北朝〕刊本 卷首

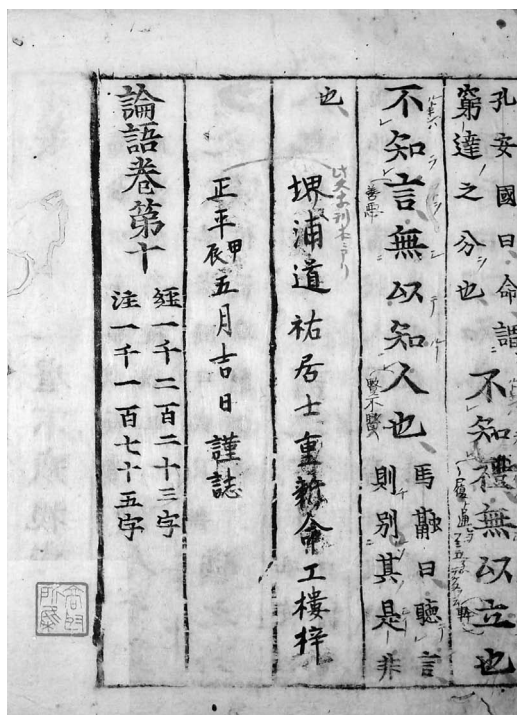


図15-2 同 卷尾

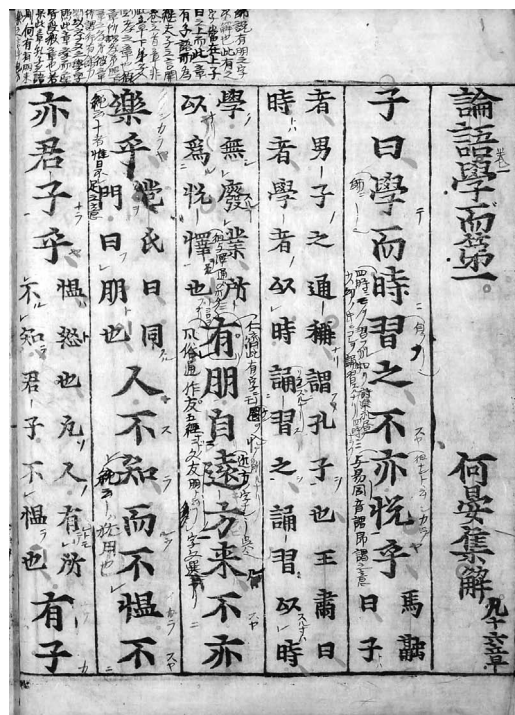


図15-1 論語集解〔室町〕刊本 卷首

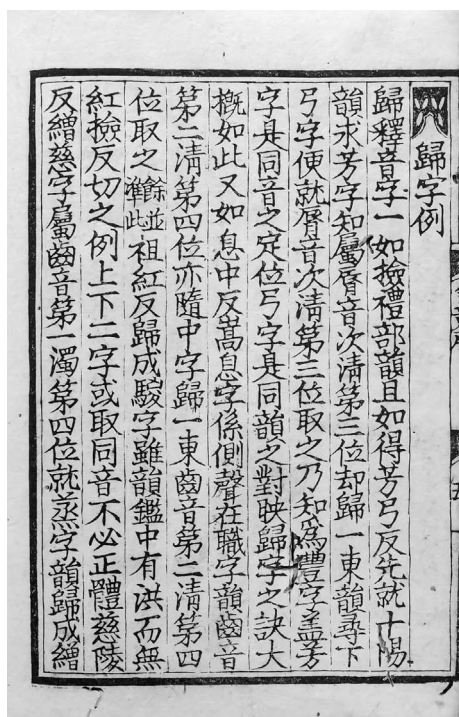


圖16-2 同 首第5張

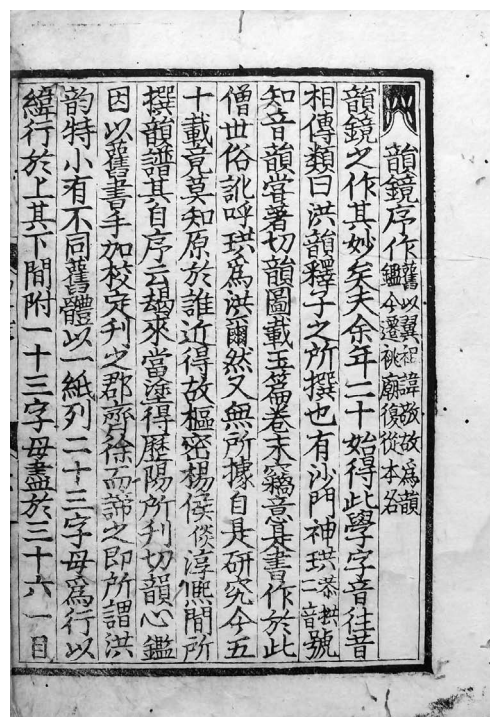


圖16-1 韻鏡〔室町〕刊本 序首

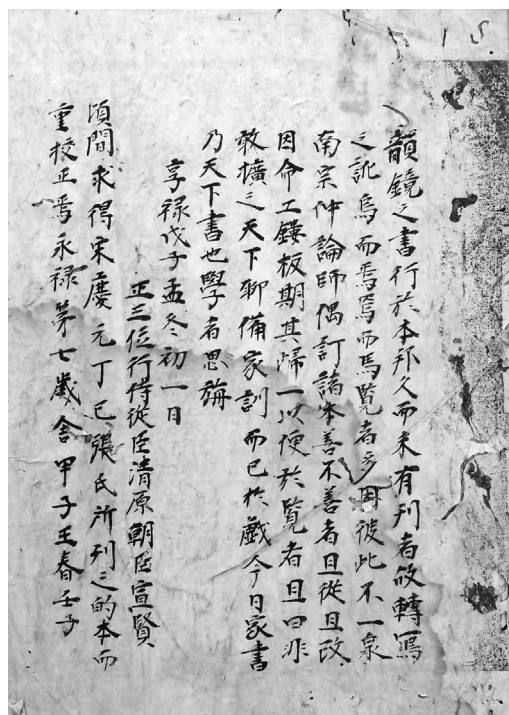


圖16-4 同 大尾



圖16-3 同 卷首

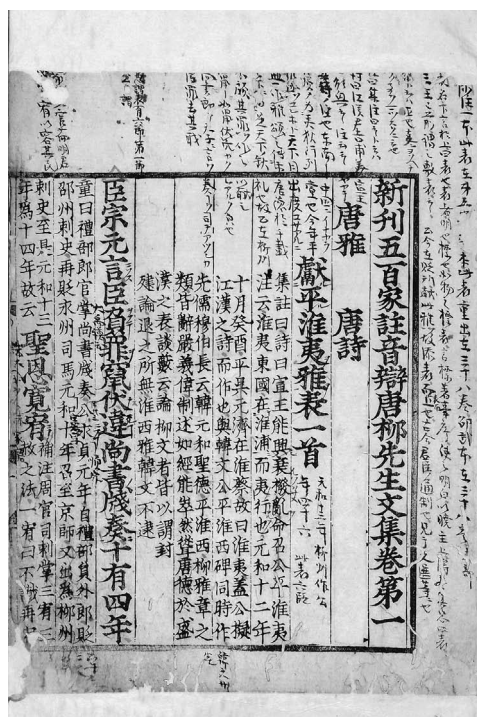


図17-2 同 巻首

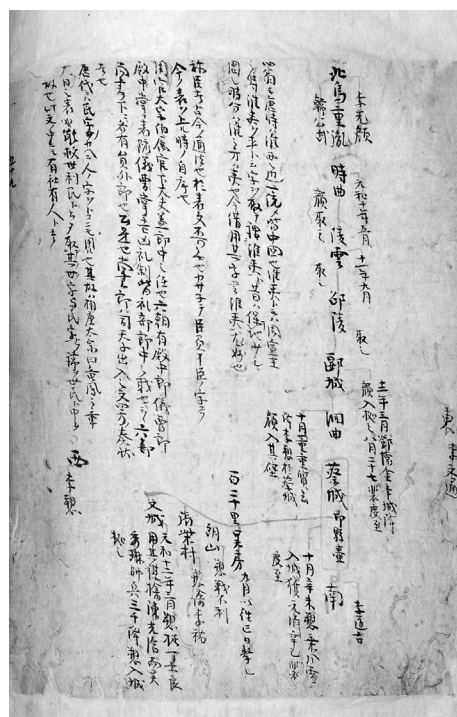


図17-1 新刊五百家註音并唐柳先生文集
〔嘉慶元年〕刊本 第3冊前見返し

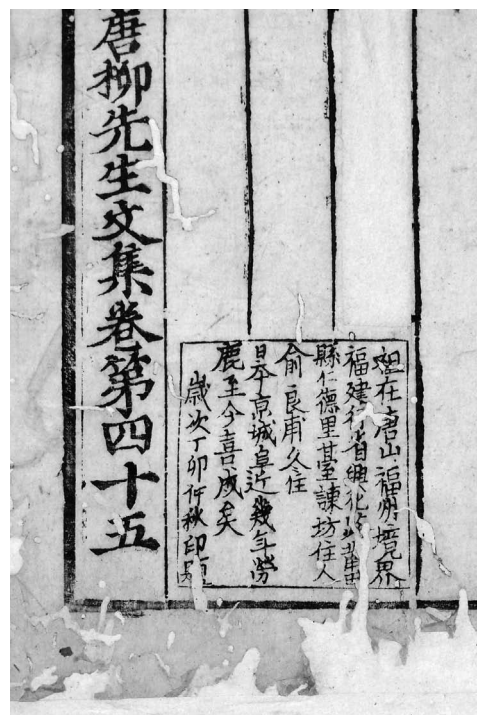


図17-4 同 巻尾刊記

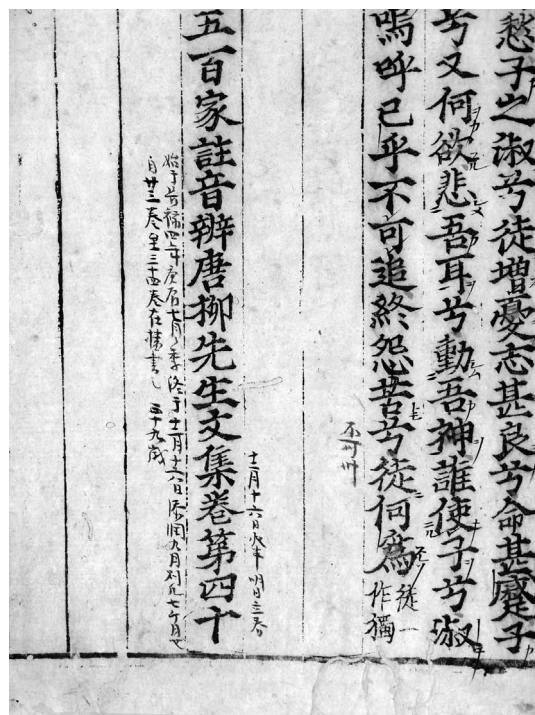


図17-3 同 巻40尾



圖18-2 同 目首

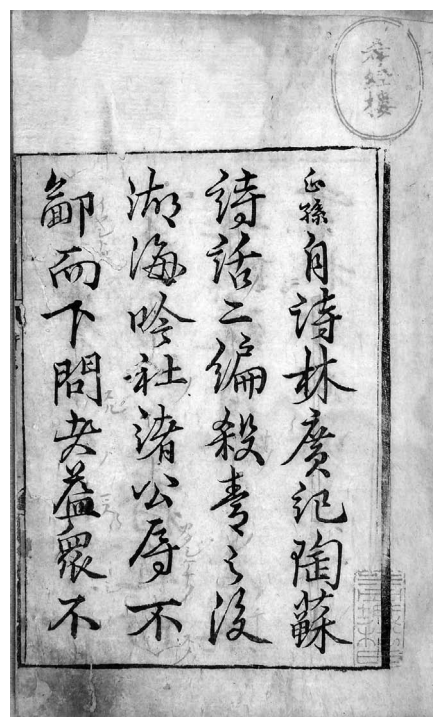


圖18-1 精選唐宋千家聯珠詩格
〔南北朝〕刊本 首

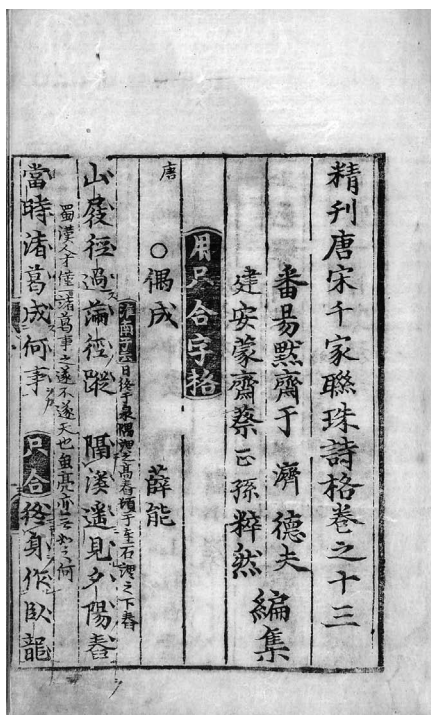


圖18-4 同 卷13首



圖18-3 同 卷首



圖19-1 御成敗式目 享祿2年跋刊本 卷首

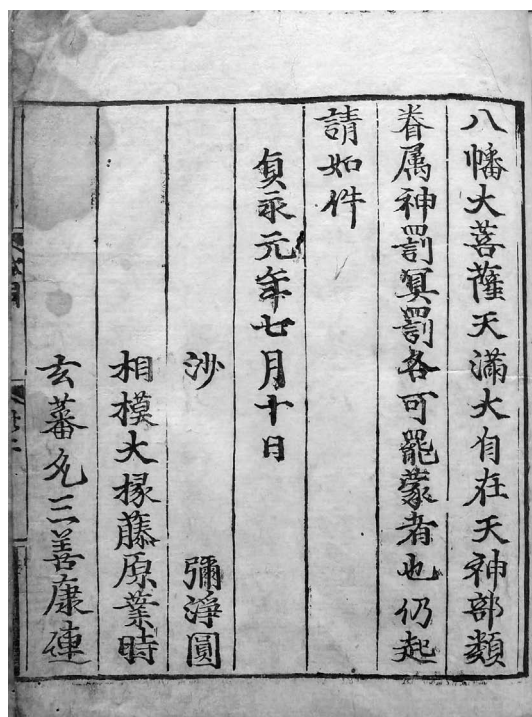


圖19-2 同 起請文末

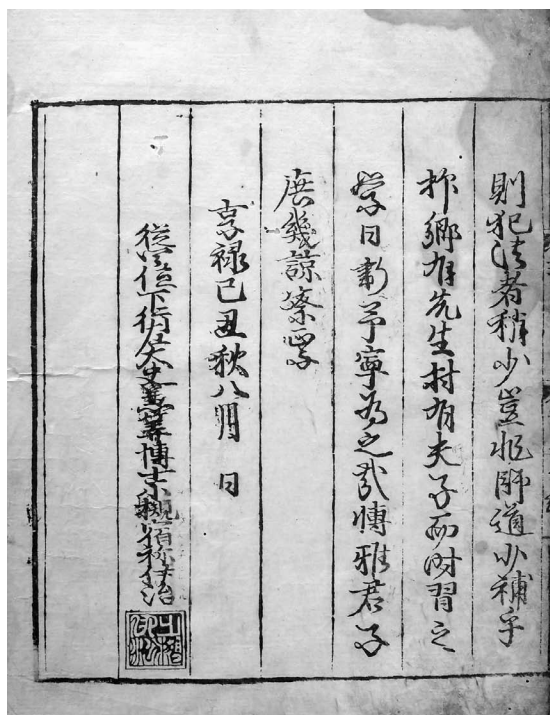
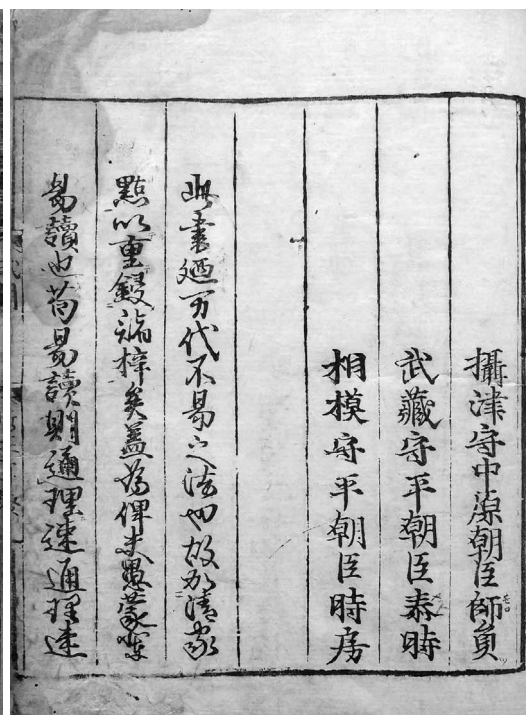


圖19-3 同 跋



圖20-2 同 卷二首



圖20-1 聚分韻略 天文八年跋刊本 卷首

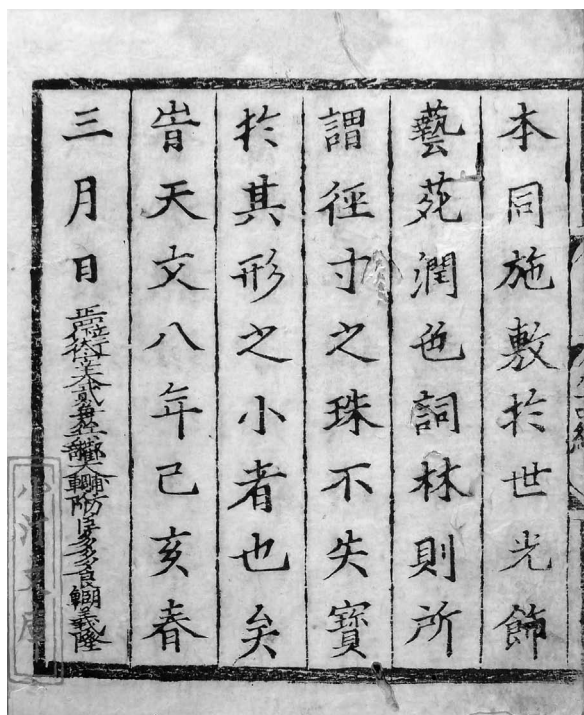


圖20-4 同 跋尾



圖20-3 同 卷尾刊記

An Annotated Bibliography of Gozan-ban editions in the collection of the National Museum of Japanese History (Summary)

SUMIYOSHI Tomohiko

Since its foundation, the National Museum of Japanese History has attached importance to the Japanese print culture and collected a large number of block books such as pre-medieval Chinese texts brought to Japan, medieval Japanese texts, and Korean texts. Especially, the museum is richly stocked with block books embodying the medieval print culture. The possession of more than 20 kinds of Gozan-ban, or Five Mountains (Zen Buddhist monasteries) Editions, is unusual for a new institution.

The collection of these Gozan-ban texts has the same structure as the whole of Gozan-ban, including not only many Zen Buddhist texts but also several general Buddhist scriptures, Chinese secular books, and Japanese books. Moreover, the collection covers publications by leading Zen temples of the time such as the Nanzen-ji Temple, Rinsen-ji Temple, Tenryu-ji Temple as well as important books printed by foreign engravers who came to Japan and led the development of the publishing of Zen temples in the latter half of the Nanbokucho period such as the Rinsen-ji Temple edition of Zenrin Ruiju and Yu Ryoho (Yu Liang-fu) edition of Toryu Sensei Bunshu. Furthermore, some of the secular books indicate the regional dissemination of publications in the Muromachi period.

A meaningful side benefit of this collection is a glimpse of medieval printing technology. The collection includes some materials on rare Nanbokucho Gozan-ban printing blocks, which enables to infer that the form was composed of two or three boards on one face and four or six boards on both faces of block. Particularly with some block books printed by foreign engravers coming to Japan, the form can be confirmed as consisting of six boards for one block.

There are many books whose annotations and ex libris indicate how these Gozan-ban books facilitated the academic advancement of Zen temples. Another meaningful point is that the Gozan-ban editions prove their distribution disseminated education to rural Zen temples and non-Zen temples and formed the basis of the academic spread from the medieval to early modern period. It is also important that early-modern and modern scholars and book collectors read the Gozan-ban books. Moreover, many of extant books selected by first-class book collectors of the day are complete early editions, which enhance the value of Gozan-ban as a book.

This article bibliographically examines the above-mentioned points, records as an annotated bibliography, and indicates the features of the Gozan-ban collection in the possession of the National Museum of Japanese History.

Key words: Gozan-ban (Five Mountains Editions), foreign engravers visiting Japan, printing blocks, Zen Buddhism books, Chinese books